九、明治の山路村

明治五年七月に、寺小屋師匠であった十二騎の武岡桃斉は、近代教育の先駆けとして、自宅を開放して山路善導校を創設した。これが現在の森山小学校の基礎となった。この学校は十七年に、内原の松尾にあった内原村と麻植塚村の組合小学校へ併合されたが、二十二年に麻植塚が分離したため、二十五年に山路へ移し、山路小学校となった。

明治十二年七月付の戸長（村長）は武岡竜五郎。十三年三月には山本半平が戸長となっており、同年五月に戸長代理として、武岡丑太郎の名がみえる。明治五年に第五大区の第一小区に編入されたが、十二年に大小区制は廃止された。その年に山路、内原、麻植塚は三村組合を編成したが、約六ヵ年を過ぎた十八年にそれぞれ分離した。二十二年に森藤、山路、内原、中島の四ヵ村が合併して森山村が発足し、旧四ヵ村は大字となった。

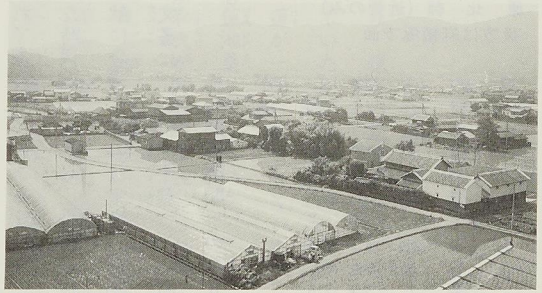
明治二十四年の徴発物件によると、戸数二五六戸。人口一四二五人。うち男七二五、女七〇〇。馬二九頭。寺三、学校一となっている。

第四節　内原村

一、室町初期に打原の文字

内原には山や丘はなく、江戸時代まで吉野川の分流が、村の真ん中を東流していたほどだから、古墳時代はもとより、飛鳥・奈良時代には、かなりの川成地（洪水時に川原となる土地）があったと想像される。その頃に、人が住んでいたかどうかは不明で、遺跡の類は現在までは発見されていない。

しかし、遺跡が見付からないからと言って、上古に全く人が居なかったと決める事は出来ない。およそ、村落を形成するにも満たない少人数が、点々と生活していた地域では、古墳などを造る人数も権力者もいないから、何も残らない例が

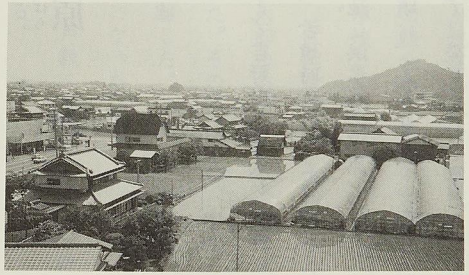


鴨島病院屋上から見た内原の東部
遠景は山路の東部山麓方面

多いからである。平安時代四百年の間に、村らしいかたちが作られて来たのではあるまいか。

この頃には、土地を持った地主が数軒あれば、村として独立した時代だったから、平安の後期には村が形成されていたようである。この村が打原と書かれて、文献に登場したのは室町の初期で、山路の仙光寺が蔵する文安五年（一四四八）十二月二十二日付の文書に、「打原中務」と「打原右馬四郎右衛門」の二人の名がある。

内原の西部（近景のみ）
鴨島病院屋上より写す



内　原　北　部（近景のみ）
後方は麻植塚方面

姓を持ったこの二人の人物は、官位を持つ地侍か、または大地主に相当し、この村の権力者である事は間違いないようである。さかのぼれば平安期か、鎌倉期には村が成立されていたと考えられるのである。

平安から中世（鎌倉、南北朝、室町の約四百年間）に勢力を得て、豪族や大地主となった者は、大ていの者がその土地名を姓にしている場合が多い事から、この村は初めから「うちわら」と呼ばれて発展したのであろう。現在の呼称は「うちばら」である。

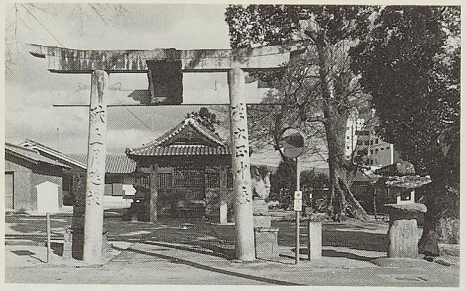
二、忠臣蓮池大和守清助

二人の打原氏とは別に、南北朝の頃から西張の地に豪族が起こり、現在の荒神社附近に墨（小城）を築いた。墨の北側には大きな窪地があって、村の中央を東流していた川が流れ込み、円形の大きな池となっていた。池は今の国道一九二号線あたりまで広がり、蓮が一面に群生していたから、蓮池と呼ばれていた。豪族は池の名をとって蓮池氏と名乗り、墨も蓮池墨と呼んでいた。

蓮池氏は蘇我氏の出で、先祖は東国の侍で南北朝の初め、細川和氏が阿波守に任じられて、三河国（愛知県）から阿波に移り、秋月城に入った時に家臣の一人として従って来たものである。その後に麻植郡打原村を賜わり、代々国侍としてこの地に住んでいたから、あるいは地名をとって打原氏と名乗った時代があったかも知れないが、確かな証拠がないため、打原氏と同一視する事はでき

ない。しかし、全くの他人と断定する事もできない。

現在の荒神社の後に、弁財天神を祀る小宮があり、その裏に緑色泥片岩製の上部が折れた板碑がある。昔はこの板碑を弁天さんと称して、後のやぶぎわで祀っていたが、元そこは川岸であった。板碑とは、その土地に住んでいた実力者の、祖先を供養したソトバであるが、川岸に建てられていたから、後世になって弁財天と習合し、江戸の後期に弁天さんの御神体にせられたようである。



蓮池墨跡に建つ荒神社
（内原西張）

深く阿弥陀三尊の種子を刻んだ工法は、鎌倉末期から南北朝期のものであり、この地が蓮池墨跡であるから、蓮池家の先祖を供養した板碑であろう。先にのべた仙光寺文書、文安五年の打原の文字の初見より、約百年も古いものである。荒神社の南に隣接する十王堂脇にも板碑が一基ある。これは室町期のもので少し後年の造立であるが、蓮池家にゆかりの者の碑であろう。

阿波守護職の細川氏は、室町幕府の管領（政務を管理した最高責任者）であったから、応仁の乱を始め、その後も続いた畿内に

おける幾十度の合戦に、当時「阿波衆」と呼ばれていた阿波細川勢は、その都度出動して活躍しており、室町幕府を支える主役であった。この時代が阿波の国人として、天下に号令をしていた唯一の時代である。蓮池氏も代々にわたり、一族郎党を率いて、阿波衆の出兵の度に出陣していた事は間違いない。

天文二十一年（一五五二）八月十九日の夜、当時の守護職細川持隆は、重臣筆頭の三好義賢と、国奉行の四宮与吉兵衛（篠原一族）に計られたとも知らず、勝瑞城外の龍音寺で、義賢が月見の宴を開くというので招かれた。蓮池家最後の主となった大和守清助は、主君の近習として従って行った。義賢は京にいる三好長慶の弟で、兄と共に近畿や阿波で勢力をのばし、三好家の支配力は九ヵ国に及んで、主家細川氏よりもはるかに強大となっていた。

その夜、義賢は主君を殺して、阿波の実権を手中におさめ、同時にかねてより内通して、相愛の仲となっている主君の愛妾で、絶世の美人と言われた、小少将の局を奪う計画であった。持隆主従十数人が龍音寺に入って間もなく、寺は二千人とも言われた三好方の兵に、幾重にも囲まれてしまった。計られたと知った主従は、近くの見性寺へ逃れようとしたが、持隆を討ち取って手柄にしようと、群がり寄る多勢の敵に斬りたてられ、従者のほとんどは主君を棄てて散りぢりに逃げ去った。

その中で、蓮池清助と星合勘太夫の二人は、主君を守って囲みを破り、ようやく見性寺へかけ込んだ。なだれを打って追って来た三好の軍兵は、寺の周囲にひしめきあふれ、三人となった主従の逃れる場所はなかった。

最早やこれまでと、家臣に裏切られた無念の形相も物すごく、持隆は腹を切って相果てた。星合勘太夫は主君の首を斬りおとすと、その場で腹を切って後を追った。

豪勇の清助はそれを見届けると、なだれ込んで来た敵の前に取って返し、大手を広げて立ちはだかると、太刀を逆手に持ち、仁王立ちに立ったまま我が腹に突き立て、真一文字に切り裂くと、たれ下がった腹わた

敵前で立ち腹を切り忠死した蓮池大和守清助

を敵に投げつけ、凄絶な死をとげた。

この事件が有名な見性寺の変である。お側役衆の中で、常に目をかけられていた四宮与吉兵衛が裏切り、三好側へ寝返って主君をだまし討ちにしたのに対し、格別の引き立てもなかった蓮池と星合の二人が、最後まで主君を守り、忠死したという噂は、阿波国の内外に広がった。敵方の三好家でも、天晴れ武士の鑑よ！とほめそやし、遺体も丁寧にあつかったと言われる。四宮与吉兵衛は間もなく、三好義賢の配下の者に首を斬られた。

現在、荒神社の南に隣接する十王堂の脇に、石地蔵や庚申塔にかくれるようにして、一基の小さな板碑が建っている。室町時代のものであるから、あるいは蓮池清助の供養碑かも知れない。

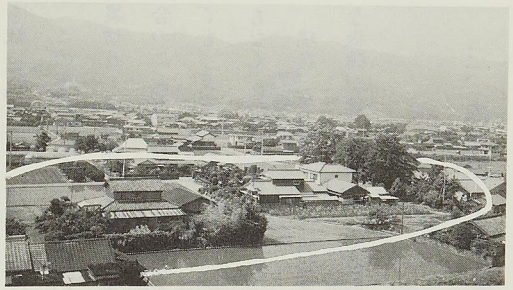
三、内原墨と石田一族

一　桓武平氏で紀伊の侍

蓮池清助が見性寺の変で死んだあと、二百十七年続いた蓮池家は断絶した。墨と領地は三好家に没収された。三好義賢は主君細川持隆を討つと、その子真之を後見する名目で阿波の実権をにぎり、

打原村に住む自分の家臣、石田彦六吉利に蓮池墨と、清助の領地を与えた。彦六は墨を拝領して入城すると、「内原墨」と改めた。この頃から現在の「内原」が使われるようになったようである。

石田氏は桓武天皇を祖とする平氏で、彦六の祖父左衛門尉佐吉は、元紀伊国（和歌山県）の住人だった。応仁の乱後も続いた畿内における大小幾度の合戦に、佐吉の子彦五郎吉清は、河内国（大阪府）高屋城主三好山城守に味方して戦功があった。その褒賞として、山城守は本家に当たる阿波の三好家に、吉清を推挙した。吉清は延徳元年（一四八九）正月元旦に、紀伊から阿波に来て、麻植郡の打原村に住み、三好家に仕えた。



内原墨のあったあたり（白線内）
（内原西張）

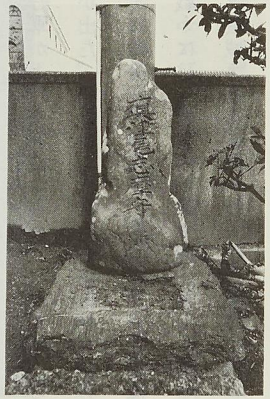
2　石田の郎党達と松尾の地名

石田吉清には五人の郎党（家臣）が従ってきた。真津尾三四郎、鎌田弥一郎、石田藤三郎、山中新四郎、岩木貞右衛門らで、それぞれ主家の近くに住んでいたようである。この中の一人真津尾氏

は、現在の字松尾に屋敷を構えた。

字松尾は国道一九二号線が、真ん中を東西に貫いているため、国道をはさんで南と北に二分された形となり、東は麻植塚に接している。松尾の地名は真津尾氏の名から出たもので、この土地は同家の拝地であったのだろう。

三四郎の孫に志摩守があって、永禄九年（一五六六）に、二十五歳で泉州（大阪府）上之芝合戦で討死したと伝えられ、国道の南側にある石田昌昭邸内に、志摩守の祠と墓がある。祠は江戸末期の嘉永六年（一八五三）八月二十八日の建立で、墓も明治初年の建立である。それまで墓らしいものがなかったので、末裔の者が造ったのであろう。和泉砂岩の自然石に「真津尾志摩守」と大書彫刻し、横面に「永禄九年丙寅天」とだけ記されている。ここは真津尾家の屋敷跡と言われている。



真津尾志摩守の墓（石田昌昭邸内）

3　泉州上之芝合戦と荒神社勧請

永禄の頃の三好一族は、阿波を本拠に大和・和泉・摂津・河内・山城・丹波・讃岐・淡路の九ヵ国（奈良・大阪・京都・兵庫・徳島・香川）に及ぶ大勢力であった。永禄七年に三好党の総師長慶が死亡したあと、三好三人衆と呼ばれた長逸・政康・友通の三人はよく一族をまとめ、畿内において、松永久秀らの反三好勢力と、一進一退の戦さをくり返しながらも、将軍家を擁して、何とか主導権を確保していた。

内原衆に戦死者が出た永禄九年の合戦とは、同年二月十七日のことで、この日三人衆の率いる三好軍は、松永・畠山・遊佐の連合軍と、泉州の上之芝（現大阪府堺市）ではげしく戦い、連合軍を破った。この合戦を、信州上田合戦と書いている本があるが、これは間違いである。記録によれば、敗れた松永・畠山らの軍では、戦死約一千人、うち三好軍が上げた首は四百六十となっている。

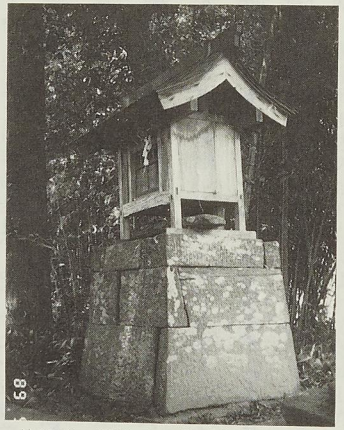
三好方の大勝であったが、味方にもかなりの死傷者が出た。内原墨二代目の石田吉利の嫡男に、左衛門尉吉春があった。この人物は、一族郎党を率いてこの合戦に加わり、郎党の真津尾志摩守と共に討死した。二人共二十五歳の若さであった。この戦いには、吉春の弟菊太夫も参加していた。

六月十一日、阿波の勝瑞城から、篠原長房（川島の上桜城主紫雲）が一万五千の援軍を率いて兵庫に上陸し、七月十四日に摂津の中嶋城を陥して、畿内はようやく三好党が支配下に収めた。

戦いが一段落すると、菊太夫は手勢をまとめて帰国する際、摂津国（兵庫県）宝塚の清荒神の分神を勧請して帰り、墨の東の方に祠を建てて祀った。場所は現在の字円ノ元、桑原寛氏方の西側に隣接する小さな森で、最初に荒神社を安置した場所と言われている。現在はその地を「古屋敷」と呼び、祠の中に一基の板碑を納めて祀っている。字西張にある内原の氏神の荒神社は、のちにこの場所から移したものである。

ここで石田氏の家系図について、不審な部分を究明して、正しい内原村の歴史にするために、一部修正しておく必要がある。

これまでに出版されている郷土の歴史関係書によると、永禄九年に死亡した吉春には、嫡男に菊太夫があって、その子に六右衛門があり、六右衛門の嫡男に外記があって、天正十年の中富川の合戦で討死。となっており、この四人の人物を、系図では四代としてあつかっている。しかし、



荒神社の旧社地の祠（内原円ノ元）
この中に室町期の板碑が祀られている

永禄九年から天正十年までは十六年間しかなく、外記は若冠で出陣し討死となっているから、十六〜十七歳位だったのだろう。外記と曾祖父とされている吉春との年齢差は、わずか二十五歳前後となるから、二十五年間に親・子・孫・曾孫の四代が存在する訳はなく、この縦の系列はあやまりである。

しかも、吉春と菊太夫は親子となっているが、年齢差はわずか三歳位であるから、これは明らかに兄弟で、吉春が二十五歳で討死したので、弟の菊太夫が石田家を継いだとみるべきである。また六右衛門と外記も親子となっているが、二人は数歳の接近であるから、これも兄と弟で二人共菊太夫の子に当たる。これまでの書物にある四人の人物は四代ではなく、実は二代にわたるそれぞれ兄弟なのである。

4　菊太夫と子息六右衛門、外記

菊太夫は吉近と言い、家督を継ぐと内原氏と姓を変え、内原菊太夫吉近と名乗った。永禄、元亀の頃である。天正に入り、土佐の長宗我部元親の阿波進攻によって、三好・美馬両郡において戦いや陰謀がくり返されるうち、天正七年（一五七九）十二月二十七日の早朝に起きた、脇城外舞中島

の合戦において、菊太夫は討死して果てた。推定年齢は三十六歳位である。

天正十年八月、長宗我部元親は、三好家に反感を持つ阿波武士を合流し、土佐勢を合わした二万三千の大軍が、名東郡黒田の原に集結した。これを迎え撃つ五千の三好勢と、中富川をはさんでにらみ合った。内原六右衛門吉貫と外記輔吉の兄弟は、近隣の村々の武士達とともに三好軍に加わり、八月二十八日の中富川の合戦において、弟の外記は討死した。家臣達にもかなりの死傷者が出たであろうが、くわしい事は分からない。内原墨はこの時、長宗我部方の焼打ちによって落城した。

元親は阿波全土を支配下におさめる事となり、内原家の領地は没収されて、六右衛門は浪人となった。内原家の知行高は六十貫となっていたから、内原一ヵ村を領していたのであろう。江戸初期の石高に換算して約三百石である。

父菊太夫の死から三年もたたない中に、弟の外記が死に、我が城は焼かれた上に領地まで失うなど、打ち続く不運に内原の姓は不吉であるからと、六右衛門は内原の姓を棄てて元の石田に戻し、改めて石田六右衛門吉貫と名乗った。石田氏が内原を名乗っていたのは、十三年位の短い期間だった。

天正十三年、羽柴秀吉の四国征伐によって、長宗我部元親は降伏して土佐に退き、阿波は没収さ

れた。同年六月、秀吉は名東郡一宮城に在陣中の蜂須賀氏に、阿波十七万五千七百石を与えた。その頃、六右衛門は侍を棄てて百姓となり、内原墨の跡地に屋敷を建てて、内原村の庄屋を勤めた。数年後、隣村中島の車池で上意により、大蛇を退治した武勇伝があるが、大蛇退治に関するくわしい事は、本書「中島村」の項を参照されたい。

内原墨は、東西に百丈余りあったらしく、荒神社の境内は墨の西の端に当たるようである。石田氏は、墨趾の一部を先人の供養地として残し、自分はその東側に屋敷を構え、周囲を開墾して畑とした。現在、荒神社の東方約百丈の地点に、内原菊太夫の屋敷跡と称する土地があり、畑となっている。

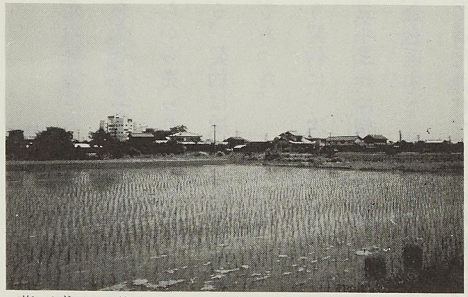
四、宝暦の藍作日本一が貧困の村

江戸時代の内原村には水田がなく、ほとんどが畑地だった。畑は麦と藍の二期作で、特に藍は村の生活を支えていた。麦は冬に種をまいて、翌年の初夏に収獲できるので盛んに作られ、麦の後作に藍苗を移植して、夏の間に二回刈り取るのである。藍苗は麦の穂が出る前に、うねの間へ植え込

み、藍作用に堀ってある野井戸から、二人がかりの二丁つるべで水を汲み上げ、うねへ流し込んで育てる。藍を作る畑は、井戸から汲み上げた水が八方へ流れ、平均に行き渡るように、井戸の位置を少し高くしてあった。

宝暦年間（一七五一～一七六四）に書かれた『御国中藍作見分録』に、〔麻植郡内原村藍作日本一〕と記されている。御国中とは阿波国中のことで、阿波は当時、全国一の藍生産地であったから、その中で一番の内原村はすなわち日本一なり、と評価しているのである。この事からも、江戸中期頃の内原村には、良質の葉藍が大量に生産されていた事がわかる。

しかし内原村も山路村と似た形で、江戸初期頃から貧困が続くようになった。農村貧困の原因は、天候不順による不作の連続や重税、災害、流行病、働き手の過労病や過労死などに端を発するのであるが、この村でもその度ごとに、西麻植や鴨島・麻植塚など、近隣の村々の大地主や藍商人から、食物や金を借



藍が盛んに作られていた畑、今は田となっている
（内原東部）

りて飢をしのぎ、重い税を納めねばならなかった。

借りた金や食物には、高利に高利が加算されて、いつの間にか元の数倍にもなる例は普通であった。支払えない者は田畑を取り上げられ、畑がなくなった者は娘を売り、二男や三男を年切りで売る例はどこの村でも共通していた。彼等は六歳や七歳の子供のうちから売られた。そして買われた家で年契約が切れるまで、下男としてただ働きさせられたのである。契約は短いもので半年から一年。ほとんどは五年、十年、二十年、または永代の長期のものまであった。

阿波において、江戸初期から中期にかけて多かった本銀返という契約に、次のような例がある。寛文八年（一六六八）に父親が、銀二十匁（一両の三分の一で米三斗三升に相当）の金を借りて、八歳の男子を二十年の本銀返で売っている。二十年目に借りた元金を返すと、この子は解放されるが、それまで二十年間、休みなく働いた労働は、すべて利子として消化された。二十年目に元金が返せなかったら、いつまでも解放されず、生涯下人として使用されたのである。

江戸の後期になると、本銀捨の契約が多くなった。これは借りる金額は少ないが、契約が満期になると、元金を返さなくても、二十年、三十年と言った期間に働いた労働の見返りが、元金と利子を消化した事になり、解放された。これは人権が一歩改善され、現代の雇用契約に近づいたものである。二十歳前後は働き盛りなので高い値がついたが、子供は口べらしもかねたので安く、ただ同然のものもあった。（阿波国人身売買史考抜書）

内原村に、人身売買の書類は見当らないが、以上はどこの村にもあった例を書いた。しかし江戸二百七十年の間に、田畑を失ったのは事実で、多くの百姓は地主に取り上げられた畑を借りて、耕作させてもらうようになった。小作人は収獲の約六割を藩へ年貢として納め、残った四割の中から半分を地主へ小作料として納めねばならず、残った二割が小作人の取り分であった。

藍作日本一と褒められても、その豊かなみのりは藩と地主と商人だけが肥え太り、村人は食うや食わずの生活が続いたのである。

五、庄屋と村高

庄屋と肝煎に関する古い記録はないが、文化四年（一八〇七）の棟附帳に、肝煎桑原兵左衛門が見え、その後に桑原鶴三郎が組頭庄屋（数ヵ村の庄屋達の上に立つ大庄屋）を勤め、近隣の十ヵ村を管轄した。

村　高（内原村）

高辻帳・郷帳（表高を記した公簿）

寛文四年（一六六四）高辻帳　二百七十二石五斗七升九合
享保元年（一七一六）高辻帳　二百七十二石五斗七升九合
天明七年（一七八七）高辻帳　二百七十二石五斗七升九合
文化十年（一八一三）上納米　三百六十七石七斗　三合
天保六年（一八三五）郷　帳　三百六十七石七斗　三合

内原村旧高旧領取調帳（明治元年）

徳　島　藩　領　五十六石四斗七升九合三勺
蜂須賀　協　知行　五十八石
長　井　太郎左衛門知行　百四十一石一斗二升二合

大多和　岩三郎　知行　百　四石七斗　二合
山　崎　藤　馬　知行　一石五斗六升四合
森　五一郎　知行　七石八斗二升　六勺
総　村　高　三百六十九石六斗八升七合九勺

六、十王堂と石造物

西張の荒神社前にある十王堂は、江戸中期の創建である。堂内には最上段中央に、一きわ大きい閻魔大王が控え、以下雛段式に地獄の罪をさばく、泰広・初江・宋帝・五官・変成・五道転輪・太山・平等・都市の九王達が、裁判官姿の座像で並び、最下段の脇に、死者の着物をはぎとる脱衣婆が、うずくまった姿で控えている。何れも木造で江戸中期の作という。

奪衣婆は、別名葬頭河ばばとも言い、閻魔大王の妹で三途川

十　王　堂（内原西張）

のほとりでうずくまり、死者の着物をはぎ取って、衣領樹の上にいる懸衣翁に渡す役目という。

十王信仰は、我が国では平安末期頃から行われていたらしく、生前に犯したもろもろの罪事を、死後において裁かれる十王達に軽減してもらうがための、願かけともいうべき信仰で、のちに十王堂や閻魔堂が建てられるようになった。

地獄の罪を裁く十王達（十王堂）

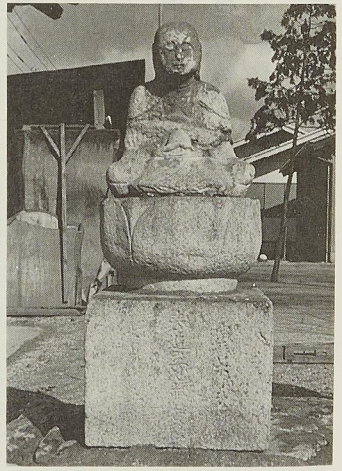
十王堂脇には板碑・庚申塔・石地蔵が各一基ある。板碑は蓮池清助の項でのべた通り室町期のもので、風化がひどく、線刻や梵字は不明で、十王堂創建よりも二百年前後古いようである。元は堂の北側にあったのを、近年にこの場所へ移しており、下部をコンクリートで固定している。

庚申塔は、初期造立期の塔婆型文字碑で、寛文十二年（一六七二）十月十八日の記銘があり、森山地

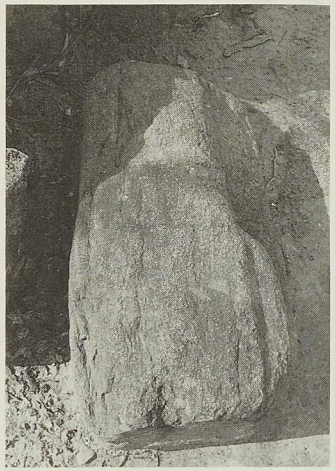
区では八番目の建立。地蔵尊は宝暦六丙子年（一七五六）七月十五日の記銘で、江戸時代になって建立されたものでは、森山地区で三番目である。

また字松尾の地蔵堂内の石地蔵は、天明年間のもので、かなり風化している。境内には光明真言二百万遍供養塔文政十二年（一八二九）七月と、年号なしの馬頭観世音供養碑がある。同所西側に昭和三十一年に建てた庚申塔は、江戸期にあったものが壊れたので、信者が個人で再建立したものである。

信仰目的ではないが、力石がある。昔は村の若者達の間で、力くらべをする娯楽があり、重い石を持ち上げて、互いの力量をきそい合った。石の重さに規定はなく、形もさまざまで適当な石が使



地　蔵　尊（西張）



荒神社の力石

用された。荒神社境内に昔は大小二個の石があったが、重い方は不明になり、現在は軽い方が残っている。それでも一三〇キロ（約三十五貫）ほどの石である。

七、明治の内原村

明治五年（一八七二）に大小区制がしかれ、内原・中島・森藤・山路・麻植塚・牛島・上浦の七ヵ村は、第五大区の第一小区とされたが、大小区制は十二年に廃止となった。同年に内原・山路・麻植塚の三ヵ村は、三村組合を編成したが、十八年に分離し、二十二年の町村制施行に備えて、近隣の村々と合併のため、交渉準備に入った。

明治七・八年頃、内原と麻植塚は、麻植塚にある民家を借りて小学校教育を始めたが、詳しい事は不明。十三年十月に字松尾に、内原と麻植塚の組合小学校を新築し、十七年には山路小学校を合併して、三村組合小学校となった。二十二年に麻植塚が離村したため、二十五年に廃して山路へ移し、山路小学校となった。

明治二十二年の町村制実施によって、森藤・山路・内原・中島の四ヵ村が合併して森山村となり、

旧四ヵ村は四大字を編成した。役場は森藤の字春日免に置いた事もあってか、これまで内原と行動を共にしてきた麻植塚は、たもとを分けて牛島村に併合され牛島村の大字となった。春日免は村の西の端に位置しているため、その後も山路や内原では距離的に不便をきたした。

明治二十四年の徴発物件表によると、内原の戸数一〇五戸。人口五八九人、うち男三一二人、女二七七人。馬十五頭となっている。

伝統産業の藍は、明治になってもなお盛んに作られていた。年貢は旧藩時代よりも、新政府になってからは、かなり楽になったが、地主に対する年貢は、相変わらず残ったうちの半分を納めた。幕末から明治にかけて、藍玉に加工して売る藍商人もいた。字桑ノ内の桑原氏（泉屋）、字西張の石田氏（ねばや）と近藤氏（かねいち）などは、大商人とまでは行かないまでも、好景気に便乗して財を得た。

明治三十年代になると、安い化学染料の輸入に押されて、藍景気は急激に衰退して行った。多くの藍商人達が、たくわえてきた財産を失ったのはこの頃である。

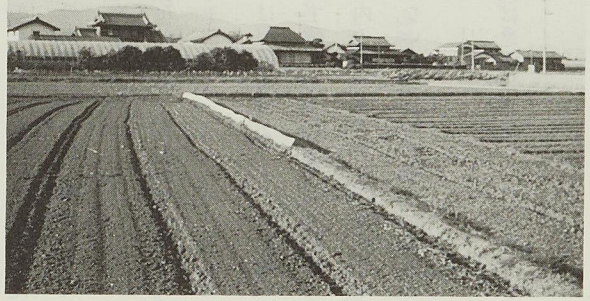
第五節　中島村

一、古記録から分析した中世の中島村

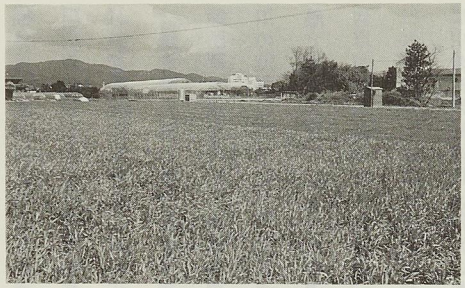
ー　村名と飯尾川の旧流路

中島に関係した古い記録は少なく、鎌倉期以前には何の史跡も文献もないようである。いつ中島村が成立されたかも定かでない。ただ、中島という村名は、吉野川や飯尾川などが洪水のたびごとに、自由勝手に流路を変えて流れるうちに、自然に川中島が形成され、この島をとり巻く周辺の地形とも関連して、中島という地名で呼ばれるようになったと考えるべきであろう。

中島にかぎらず、現在の鴨島町内にある島と名のつく地名、粟島、上下島、呉島、乗島、神島、鴨島、牛島、知恵島、天島なども同様で、これらは知恵島のように、平常でも川に囲まれていた所もあり、また常に水に囲まれていなくても、少しの出水で川中島となって孤立した土地もあった。現代感覚では想像もつかない、大自然のいとなみの中で造られた地形の中に、人々が住みつき、それぞれの村が成立されて行った。



中島東部の風景（宮地橋から写す）



ビニールハウス附近が諏訪原
近景の畑は飯尾川の旧流路

中塚商店街、現在は鴨島地区に編入されている

中島もその一つであり、往昔の人々の、この地を指す呼び名が「中島」であり、そのまま村の名となったのであろう。

鎮守である諏訪神社は、もと中島村と飯尾村が接する地点の諏訪原に、文治二年（一一八六）に勧請したと伝えられている。

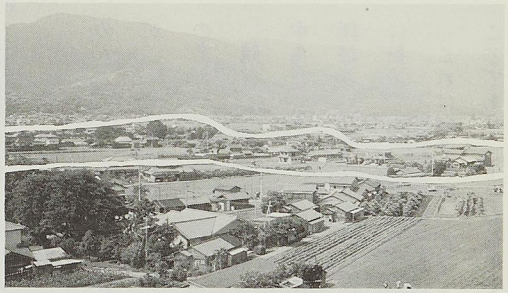
これは鎌倉初期の創建ということであり、すなわち平安の末

期には、村が成立されていたとみるべきであろう。この頃には、周辺の村々がすでに成立していた事からみても、当然といえるが、ごく少数の人々の住む、小さな村であった事と思う。

鎌倉時代頃の飯尾川は、現在の諏訪神社の西約百㍍附近から、諏訪原と飯尾東部の字福井の境界に沿って南下し、現在の三谷川の流路とほぼ同じ所を東流していたようである。つまり、森藤との境界が、飯尾川の本流であった。この流れを境にして、右岸が飯尾村および森藤村、左岸が中島村となった。

水辺の神である諏訪大明神は、当時の地形では、南流する飯尾川の東の岸辺にあったとみるべきで、この周辺が諏訪原という地名になった。

また中島村の最北端の中塚と、喜来村との境界には、江戸期になってもなお吉野川の分流が東流していたため、南岸が中島村および内原村、北岸が喜来村に分かれていた。現在の県道沿線が、当時の河道である。中塚は元は中須賀であったと言われ、須賀とは水流によって運ばれてきた土砂が、



白線内の左が中島中部。右が中島西部。
近景は内原西張

積もって島になろうとする初期の地形をいう。中塚地区は中島分であったが、現在は行政上の都合で鴨島地区に編入されており、中島から分離している。

2　安良賀池と大納言

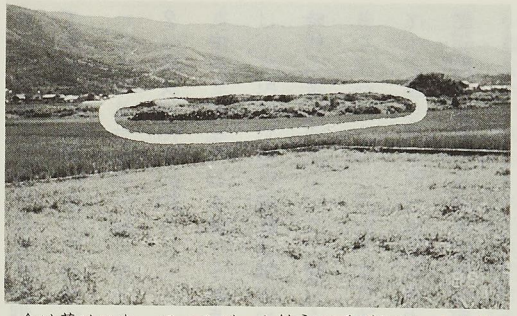
中島と飯尾東部が接する地点、県道西麻植下浦線の北あたりは、室町時代には安良賀池という大きな池になっていた。鎌倉時代頃まで飯尾川がこの附近を南下していた頃、この地点に大きな広い渕を作っていたのであろう。その後に川は流路を変えて、現在の流れにほぼ固定されたために、この渕がとり残されて河跡湖となった。それを室町の頃には「アラガ池」と呼んでいたようである。村邑見聞言上記によると、

〔安良賀池、諏訪の旧地より西南に当たりて、一丁余（約百十㍍）の地にありて、往古にはいとど（ひとしお・ますます）大きなる池なりし。されど今はいささかなる跡も残らず、いつの

あらが池跡附近
（中島と飯尾の境界）

頃より絶はてたりけん〕

と書かれており、江戸の中期以降には、池の伝承だけが残っていて、すでに池はその跡さえわからなくなっている。池は室町時代から、江戸初期の頃まで存在していたのであろう。安良賀池の文献は、池の所在地を知るだけでなく、飯尾川の流路の変遷を知る上で、重要な証明となっている。



今は墓地になっているが、大納言と呼ばれていた土地
（白線内）

つまり中島村の成立期とみられる古代には、飯尾村や森藤村とは、川が境界線となっていた。その川に水が流れなくなって、河跡湖が残されたのが室町時代となると、その頃に川の流れは、ほぼ現在のかたちとなった事が分かるのである。

また大納言について、同記は次のように書いている。

〔飯尾川東南に向いて流れる川辺より（現在の字桑ノ内あたり）、少し東に三昧（墓地）ありて、下下畠あり。寛永四年（一六二七）の御帳に、三昧下下畠五畝二十九歩、名負大納言とあり、いかなりし人にやと問へ共由来さらに知れず、其上

彼畠地之名負今の誰か家にして、何という者の先祖に当たれりとも詳には知れずとなり、いかなる故にかありけん。いぶかし〕

下下畠とは、十等級に順位をつけてある九等地のことで、やせ地、川成地、日陰地の畠、または鳥獣の害をうけやすい山畑など、生産価値のきわめて低い畠のことである。昔大納言と呼ばれていたこの土地は、中島と山路の境界にある宮地橋の南西五十㍍の畑の中にあり、ほぼ正方形をした広さ約六畝（六アール）余りの墓地である。全体が高さ一㍍位いの盛土にしてあり、古い時代における、身分の高い人の屋敷趾のようである。おそらく室町時代かそれ以前に、通称で大納言様と呼ばれた人の屋敷があったのであろう。もちろん本物とは考えられず、大納言家の血を引く者か、または仕えていた者が流れてきて、住んでいたのかも知れない。

3　車池の大蛇退治

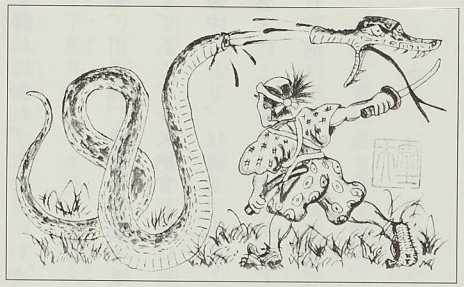
戦国時代頃、粟島と西麻植の境界あたりから、吉野川が細い分流を作って呉島を通り、上下島で南北に分かれていた。北の流れは、現在の麻植協同病院の北側を迂回して南下していた。南の流れは、国道一九二号線よりさらに南側を東流して、上下島村と鴨島村が接する赤子屋あたりでよどみ

を作り、北を迂回して来た流れと再び合流して、中島村を横断し、内原村へ向けて東流していた。

その途中で、中島村に入ったあたりが窪地となり、川の水が流れ込んで大きな池となり、車池と呼ばれていた。言上記によると、

〔鴨島、上下島の間より赤子屋を経て、当村の地に落ちいりし川筋にありし池なりとて、今に存ぜり。されど今はその幅三畝（三アール）ばかりの池なり、往古には大きなる池なりけるにや。天正の頃抔には大蛇の住みて、往来の人なやませしとぞ。内原村なる内原菊太夫が伜六右衛門へ、従御上古大蛇退治被爲仰付、数日心がけうかがう所、折よく見付け、鉄砲にて打ちたりしに件の蛇、彼の男を目がけ飛びかかりけるを、脇指（差）にて切留ける程に、首尾とも池に落ち入りて、くるい死にたりとなり〕

これを解説すると、享和から文化の頃は、池が小さくなって三畝ばかりになっているが、昔は大きな池であったらしい。天正の頃とは、この物語に概当するのは、天正十四年（一五八六）



六右衛門は、お上の仰せにより
大蛇を退治した。

から天正二十年までの六ヵ年間を指す。内原菊太夫が伜六右衛門とは、天正十年の秋、土佐の長宗我部勢によって落城し炎上した内原墨の大将、石田六右衛門吉貫のことである。当時は武士をすてて内原村の庄屋を仰せつけられ、かつての墨跡に屋敷を建てて住んでいた。石田氏が内原姓を名乗っていたのは、菊太夫吉近の代から十三年間位の短い間で、六右衛門の代になって内原墨が落城したあと、内原姓は不吉が重なるとの理由で、元の石田にもどしていた。

車池は隣村の中島村とはいえ、石田家の西三百以足らずの地点にあるため、武芸の心得のある彼に、御上（家政公）から大蛇を退治して、通行人の恐怖をとりのぞけと命ぜられたのであろう。新領主から下命があるくらいだから、大蛇が通行人をおびえさせているという噂は、かなり有名になっていたと考えられ、それまではたたりを恐れて、捨て置いていたのかも知れない。

彼は数日間さがしていた所、折よく見付けたので鉄砲で撃ったが、大蛇は六右衛門に襲いかかって来たというから、弾丸はかすめたか、当たっていたとしても急所を外れていたのであろう。脇差（小刀）で斬り殺したという事は、すでに武士ではなく、百姓となっていたから、小刀を差して出かけていたのである。首尾とも池に落ちて、くるい死にたり。とあるのは、六右衛門は岸辺に立って鉄砲を撃ったらしく、襲って来た大蛇の鎌首を、小刀で横に斬り捨てたため、首の方と尾の方が

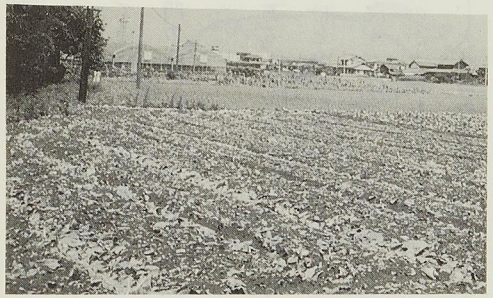
別々に池に落ち、もだえ死んだという事である。六右衛門は、数年前までは戦国武士として、数々の戦場で戦ってきた経験があるから、大蛇退治ぐらいはさしたるほどでもなく、一刀のもとに斬りすてたのであろう。

二、片山墨と岸右衛門重長

現在の中島東部、字片山の地に戦国時代、片山墨という小城があった。内原村西張にあった内原墨から、南東へ約二百㍍のあたりで、東西に百八十㍍、南北の最大幅百㍍ほどがその域内である。

城とか墨とか言ってもこの時代は、村に君臨していた豪族達の屋敷を指し、堀や塀をめぐらして、城構えに造ってあるものをいう。

片山墨と内原墨は同じ年代にあって、城主は共に三好家に仕えていた。元亀・天正の頃の片山墨は、岸右衛門重長が城主で、三



片山墨趾ビニールハウス附近及び畑一帯（中島片山）

好長治公の御側役を勤めたこともあった。

重長は飯尾東城主、麻植志摩守氏義の二男として生まれた。麻植氏に関係した記事は、本書の森藤村の中で、麻植備中守氏豊の項に書いてあるが、同氏は清和天皇を祖とする源氏で、足利一門に足利泰氏という人があり、その二男の氏継が尾張国（愛知県）の山田を領していたので、山田氏を名乗っていた。四代目民部俊氏は細川氏に従って阿波に移り、美馬郡貞光村を領したが、その子太郎重時は、麻植郡飯尾村で百五十貫（七百五十石）の地を与えられ、忌部神社の社主の養子となって、姓を麻植氏と改めた。

麻植氏初代の重時から数えて七代目が氏義で、嫡男が志摩守重俊、二男が岸右衛門重長である。兄弟とも三好家に仕えていたが、兄の重俊は天正七年（一五七九）十二月二十七日の早朝に起きた脇城外の合戦で、内原菊太夫、飯尾久左衛門らと共に討死した。三十七歳の若さであった。重長は重俊より五つ歳下で、麻植氏を名乗らず、片山を氏としているのは、片山家へ養子に来て家を継いだのであろう。

天正十年八月二十日、長宗我部元親が大軍を率いて土佐を発し、板野郡勝瑞城攻めのため、中富表に向かうとの報に、勝瑞城の大将十河存保（三好長治の弟）は、板野と阿波の二郡及び、麻植と

名西両郡の平地部に住んでいる三好の家臣に、勝瑞入城を命じた。

その頃の三好家の支配地は、わずかにそれだけと、美馬郡の岩倉、脇の二城だけが味方で、その他の阿波の武士達は、ほとんどが長宗我部方であった。

片山重長は入城を命ぜられるがままに、我が塁の門を閉ざすと手勢を引きつれ、近隣の武士達と共に、中富川の北岸に陣を敷いている三好軍に合流した。

しかし五千の三好軍に対し、長宗我部軍は二万三千の大軍であった。先ず吉野川南岸にある麻植と名西の小城は、戦いの前に全て焼き払われた。片山塁、内原塁、飯尾城、飯尾東城、大木塁、山島城

中島村片山塁無血落城（天正十年八月）

鴨島城、乗島塁、知恵島城、原塁、角田館（すみだだて）以上は当時、現在の鴨島町内にあった城塁で、大将達の留守中に無血落城し、炎上した。更に近辺にある、意に従わなかった神社や仏閣まで、ほとんどが焼き払われた。

八月二十八日、中富川の合戦が火ぶたを切り、はげしい戦いの果てに、三好軍は四百人の戦死者を出して大敗した。この日の戦いで三好方では、五十七人の名のある武士が討死したが、重長もその一人で、まだ三十五歳の働き盛りであった。戦いのあと、片山家の領地の中島村は没収された。

その後、蜂須賀氏が入国すると、重長の子は侍を捨てて百姓となり、かつての広い塁の趾を耕して畑を作り、その一角に屋敷を建てて住んだ。江戸時代になってからは、代々豪農として栄えたが、幕末の頃から家運が傾き始め、明治になると次第に没落し、やがて土地や家財を売り払って九州へ移転した。

三、諏訪神社

中島村の総鎮守、諏訪神社は、初め飯尾村との境界の諏訪原にあったが、昔大水が出た年に流さ

れて、上下島の東の端、諏訪の元へ漂着したので、よそ村ではあるがこの地へ安置していたという。

昔は神社が流されたり、大風で飛ばされると、その落ち着き場所が神様のお気に召す所なり。という考え方が尊重され、元の位置へ戻すことはせず、その場所へ安置するのが通例であった。

諏訪神社（中島字福井）

しかし誰もが不自然に思うのは、大水の時とはいえなぜ上流の、しかも対岸の上下島へ流されたかという疑問である。

「上下島の諏訪ノ元は上流に位置しており、中島の諏訪原は下流にあるので、上流へ向かって流れ着いたという事は、あり得ん事じゃ」

という人の説はもっともである。三谷川の水が押し上げたのではとの説があるが、三谷川は低くてここまで到達できず、本流である飯尾川の洪水はその十倍の水量にも達し、急流となって流れ下る。その急流に逆らって、支流である三谷川の水が、上流へ向かって社殿を流して行き、しかも急流を横切ってまで、対岸へ運んだなどの推理は、理屈に等しい。

当時の社殿は、かなり小さなものであったと思われ、おそらく夜中の大しけの際に、南東の大風で飛ばされて、上流の対岸にある上下島へ落下したのであろう。夜が明けてからそれを発見し、昨夜の大水で流れ着いたものと判断したのかも知れない。

村邑見聞言上記に

〔今上下島之地に鎮座の諏訪大明神、往古には彼社地より巽（南東の方角）に当たりて、飯尾川より南に、畠地の諏訪という所是なり〕

と書かれている。巽は南東の方向にあたるから、まさしく台風のたびに吹いてくる風の方向である。また郷土の出版書籍によっては、慶応元年（一八六五）の大水で流れて来たと書かれているが、言上記は慶応元年よりも六十年余りも以前の記録で、しかも中島諏訪原の旧社地を、往古と表現しているから、少くみても百年以上も前の出来事を書いている。おそらく桃山末期の慶長元年か、江戸初期の慶安元年を、慶応元年と誤記したのであろう。慶長と慶応では二百七十年差、慶安と慶応でも二百十七年という大変な時代誤差があり、慶応説は明らかに訂正しなければならない。

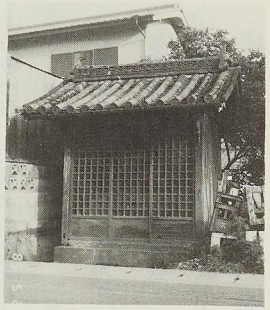
大正年代になって、いつまでもよそ村に氏神を安置しておくのはいけない、と言う事で、大正十二年（一九二三）四月に、飯尾川南岸の字福井へ移して祀り、現在に至っている。

四、廃寺福智院

鴨島町の喜来字乗島の杉尾神社が所蔵する、寛永八年（一六三一）正月二十三日の、棟札の裏側に、

〔宮之坊牛之島願成寺、中島村福智院宿勢〕の文字がある。願成寺は、仙光寺文書天文二十一年（一五五二）と、永禄十二年（一五六九）に見えている。一説には、江戸初期に廃寺になり、元和三年（一六一七）に中興されて、宝王院と改号したという。杉尾神社の棟札寛永八年は、元和三年より十四年後のものであるから、宝王院と改称してからも、しばらくは旧名の願成寺で呼ばれていたようである。

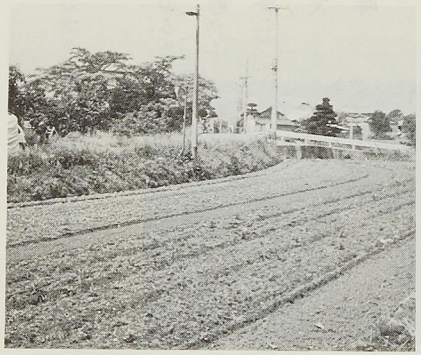
中島村の福智院については、地区に伝承があったであろうが今は途絶え、跡地も不明となっている。ただ、寛永八年にはまだ中島村のどこかに、福智院と号する寺か、または庵があって、宿勢という坊さんがいた事は確かなようである。福智院の後身と目される地蔵堂が、飯尾川の南岸字桑ノ内にある。現在の自治会名、中島中部の井出酒店の西に隣接して、県道の南側にある地蔵堂がそれ



地蔵堂（中島桑ノ内）

で、堂内に安置されている石地蔵は、享保十三年（一七二八）九月二十四日の造立で、江戸時代中に森山四ヵ村で造立された七体の石地蔵のうち、中島村のこの地蔵が最も古く、台石には願主の恭蓮という、坊さんらしい人の名が刻まれている。享保十三年は寛永八年から数えて九十七年後になるから、福智院はこの間に廃寺になり、恭蓮がその跡地に地蔵尊を再興したのであろう。ここには庚申塔、宝暦二年（一七五二）が建てられているなど、このあたり以外の地に、寺院に関係した場所は見当らないから、福智院があった可能性はきわめて高い。

とにかく江戸時代には、この地が地蔵信仰の聖地であった事は確かである。地蔵堂内にはもう一体、石造りの弘法大師の座像も安置されており、明治十一年（一八七八）五月二十一日の造立である。



福智院跡か？（井出酒店附近）

五、江戸期の記録

1　牛飼原運上金覚書

寛文十二年（一六七二）に書かれた、牛飼原運上金上納の覚書きによると、現在の県道、西麻植・下浦線の飯尾川にかかる宮地橋（中島と山路境）から、西南に当たる水田地帯は、寛文の頃は川成地で草原が広がり、牛の放牧地となっていた。当時は牧場とか、まきばと呼ばす、ずばり牛飼原と記している。

覚

東原　牛飼原　六反三畝　　中島村

西原　牛飼原　二反二畝十五歩　　同

反数合八反五畝十五歩、但運上銀一反に付一匁五分宛

のどかな飯尾川の流れ

運上銀とは、藩側から一定の金額を決めて、一年にこれだけ納めよと、命じた税金をいう。現在も字東原の地名が残っているが、江戸期には西原もあって、牛飼原は東原と西原にまたがっていたようである。

一反当たりの年貢は、銀で一匁五分を納めている。銀十分が一匁に当たり、六十匁で金一両に相当するから、一反につき、一両の四十分の一という、僅かな金額であるが、当時は川原にある牛の飼草にまで、税がかかっていた事がわかる。

2　庄屋及び御用金調達

江戸初期における庄屋は不明であるが、寛文十二年（一六七二）十一月に、肝煎杢兵衛がみえる。中期以降は、中筋在の桑原家（現桑原孝夫氏方）が世襲で勤めたようである。家号も政所といい、中でも桑原繁左衛門は、組頭庄屋（数ヵ村の庄屋達を取り仕切る大庄屋で、御頭とも呼ばれた）を勤めた事もあり、附近十ヵ村を管轄したという。

慶応四年（明治元年）の、藩庁よりの御用金調達には、夫役御免人荒尾安太が三十五両、五人与の角蔵が三十両を献金している。

3　村　　高（中島村）

高辻帳及び郷帳（表高を記した公簿）

寛文四年（一六六四）高辻帳　百六十九石三斗一升六合
元禄三年（一七〇〇）郷　帳　百六十九石三斗一升六合
享保元年（一七一六）高辻帳　百六十九石三斗一升六合
天明七年（一七八七）高辻帳　百六十九石三斗一升六合
天保六年（一八三五）郷　帳　百九十八石八斗　七合

中島村旧高旧領取調帳（明治元年）総高　二百六石三斗四升七合六勺

徳　島　藩　領　十六石六斗一升五合　荻野四郎左衛門知行　八石六斗七升一合
山岡　省吾知行　十五石六斗七升二合　村上　伊八郎知行　八十三石五斗四升一合
三沢　輝吉知行　五石九斗　一合五勺　高畠半太左衛門知行　七十三石一斗七升　一勺
小川　丈夫知行　二石四斗四升七合　小倉　富三郎知行　三斗三升

六、幕末から明治へ

現在の中島中部自治会の、県道の南側を十数ほど入った松賀邸の西の辻に、文化年間に地蔵尊を建立したが、その後に洪水で不明になり、明治二十八年（一八九五）七月二十四日に、六地蔵尊を再建立している。同所には地蔵尊と同日に、珍しい角柱の光明真言百万遍の塔を建てている。また文化八年に、舟型をした小形の馬頭観世音を建立し、これは現存している。

東原の旧墓地にも嘉永七年（一八五四）三月記銘の光明真言供養碑があり、井上吉右衛門の名がある。

明治五年（一八七二）に大小区制がしかれ、牛島・上浦・山路・中島・森藤・内原・麻植塚の七ヵ村は第五大区（麻植郡全域）の第一小区に編入されたが、十二年に廃止された。

西部松賀氏横の六地蔵

大小区制中の七・八年頃、中島と森藤は二村組合で、森藤の春日免で民家を借り、二村組合小学校を開設し、十三年に近くで二階建て校舎を新築して移転した。

明治十二年前後の、中島村の戸長（村長）は井上恰であった。十二年から十八年までの間、中島と森藤は二村組合を編成したが、その後に分離し、それぞれ独自に来たる二十二年の町村制実施へ向けて、近隣の村々と合同議会を重ねて、交渉を続けた。

明治二十二年に町村制が施行され、森藤・山路・内原・中島の四ヵ村が合併して、新森山村が発足し、旧村は四つの大字を編成した。

明治二十四年の徴発物件によると、戸数一〇五戸。人口五五九人、うち男二八七、女二七二。馬二十二頭。船二そうと記録されている。舟は飯尾川を通行した物資運送用で、この頃は川工事が行われていて、舟の通路が確保され、上流の飯尾村でも小型舟が使われていたという。飯尾川は水量が少いため、竜骨のない底が浅くなったイクイナという小舟が、使われていたようである。

舟の所有者は不明だが、二人の船頭が居たのであろう。舟着場は中島東部の長渕であったらしい。長渕は十二騎橋の上流約四十㍍、農協森山支所の北にあたり、昔は深くて両岸が広く、荷物を積んだ舟が自由に方向転換できた。

川港があった長渕、小島のある附近、左は農協森山支所

この渕には昭和になっても、まだ川漁師の舟をつなぐ杭や桟橋があった。川舟の下りは、藍玉や穀物やその他の農産物を積み、上りは塩や酒、灯油（なたね油）のほか、にしんかすや油のしぼりかすなどの肥料を運んだ。

下りは流れにのって、竿一本で下るから楽だが、上りは二人がかりで上る。一人は舟にいて竿をあやつり、一人は舟の先端に綱を結びつけたのを、岸伝いに曳いて逆のぼった。岸で引っ張る人は、流れに入ったり岸へ上がったりしながら引くので、足には半分しかないわら草履をはいていた。これを足半という。

イクイナ舟でも、馬六～七頭が運ぶに相当する輪送力があり、一般の家々では米の飯や塩鰯など、一年のうちで数えるほどしか食べられなかったが、川舟の船頭は毎日米の飯を食べ、鰯や塩さばなどをお菜（副食物）にしていたという。

第二章　教　育

中塚の大塚邸の藍蔵（中島中塚）

江戸末期から明治にかけての中島村は、自作農家が多く、山路村や内原村にくらべると、かなり豊かであった。村の最南端の桑ノ内やえびす野の旧街道沿いには、数軒の商家があり、また最北部の中塚の街道にも数軒の商家が並んでいるなど、当時としては珍しい「町」のある村であった。紋日や地蔵の縁日には、この両端の「町」は大勢の人々でにぎわいを見せていた。

また中塚の大塚氏は、幕末から藍商人として活躍し、森山四ヵ村の藍商達の中では、同家と森藤村の土岐家が、特に大商人として名が高く、近郷に知られていた。

大塚家には、麻植や名西の山分の村から、同家専属の常用人が居て、年間を通じて十五人から二十人が泊り込みで働いていた。藍景気が衰退し始めた頃、多くの藍商達が貯えてきた財産を失ったが、同家は時代に即応した商法で、損害を最少限に押さえて切り抜け、その後は養蚕農家となって大勢の人々をやとい入れ、営農に専業した。

第一節　明治以前の教育

長い戦乱の後、天下を統一し政権を握った徳川家康が、治政の方針として、学問を奨励し文教の復興を図った。歴代将軍もこれを継承し、その発展につとめたが、当初は公家・僧侶・武士などの上層階級に限られ、一般庶民はその恩恵に浴する機会も余裕もなかった。

庶民の教育機関として、各地に寺小屋や私塾が普及するようになったのは、江戸中期以降である。これは平和が続き、生産も増大し、農村も次第に商業化するようになると、日常生活や生産活動においても、知識や技能を必要とするようになったためである。

本町においても、安永年間（一七七二～一七八一）に寺小屋の記録がある。（牛島、西覚寺）商品生産としての藍作農家が多かった本町では、藍商人の活動も活発であり、経済的な余裕とともに、子弟の向学心も次第に高まり、江戸末期には各地で、寺小屋や私塾が次々と開設された。

その中、森山地区として記録に残っているのは次の人たちである。

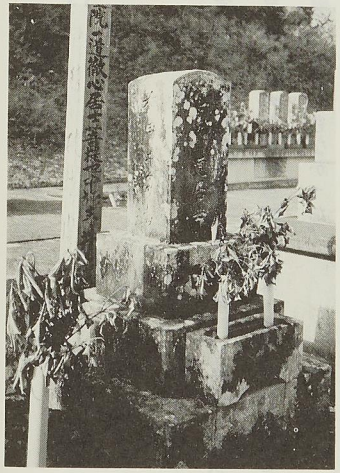
一、寺　小　屋

1、真鍋清蔵（森藤）（当主、真鍋賢一氏）安政年間から明治五年頃まで約二十年間、向学の子弟を教育、明治元年頃の最盛期には、男子五〇名・女子一〇名に上った。

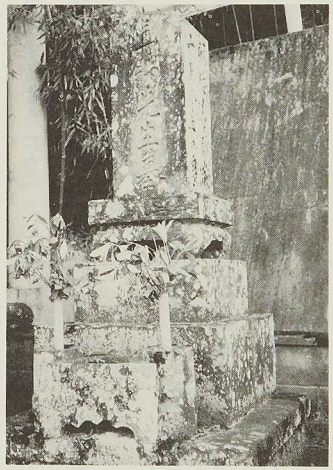
2、井出安蔵（山路）（当主、中島、井出生雄氏）安政年間から明治元年頃まで約十五年間。

3、桑原清次、地区・年代等不詳

4、藤井惣三郎　地区・年代等不詳



井出安蔵の墓（玉林寺墓地）



門弟達のつくった真鍋清蔵の墓

二、私　塾

1、河原虎太郎（山路）

元治から慶応年間にかけて、四～五年の短期間であったが、近隣の子弟の教育に当った。

河原家は県外転出により、同家墓地は、山根正一氏（橋本）が管理している。

河原家の墓（山路橋本墓地）

〔註〕

寺小屋での学習は、主として、読み・書き・算盤であり、私塾においては、漢学が主であった。

第二節　明治以後の教育

一、学校教育

―小学校

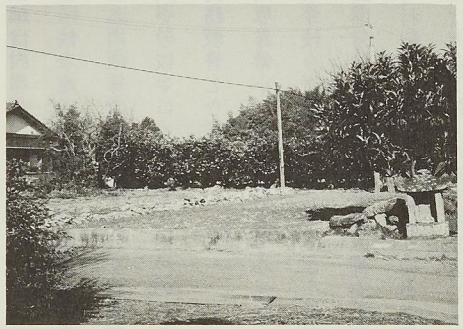
明治五年七月、山路村、武岡桃斉が、善導校を自宅（橋本）に開設、読み・書き・算盤の他、裁縫をも教授した。これが私立学校の草わけであり、その後の公立学校設立の足がかりとなった。

明治五年八月、学制が頒布されるや、各地で公立学校創設の気運が高まり、幾多の試行錯誤的な改廃があったが、近代教育への歩みは着実に進められた。

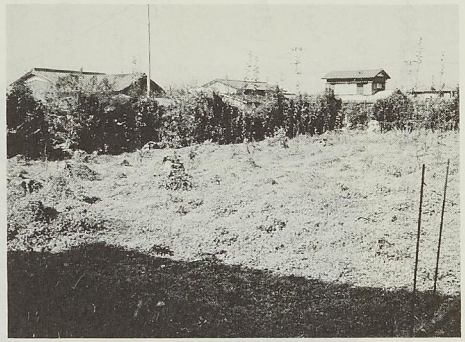
現森山小学校が今日に至るまでの経過を、記録により辿ってみると次のごとくである。

明治七、八年頃　山路村では、私立善導校が山路小学校となり、森藤村・中島村を通学区として

森藤小学校が、内原村・麻植塚村を通学区として麻植塚小学校が、共に民家を借用して創設



森藤小学校敷地跡（春日免）



山路小学校敷地跡（橋本）

明治十三年　四月に森藤小学校が、校舎（二階建一棟）を新築移転。十月には内原小学校が麻植塚小学校を統合して、字松尾に新築移転。

明治十七年　山路・内原両小学校を合併し、三村小学校を設立（三学級・四教員）。
校地は内原村字桑ノ内。

明治十八年　小学校令改正により、公立森藤尋常小学校、公立内原尋常小学校とそれぞれ改称。

明治十九年　（小学校令により尋常小学校の四年間が、義務教育となる。）

明治二十一年　内原尋常小学校に麻植高等小学校（川島町）東分校を併置。
（同分校は明治二十七年三月廃止）

明治二十二年　町村制実施により、森藤尋常小学校は大字森藤・中島を通学区に、内原尋常小学
四月　校は大字山路・内原を通学区とする。
（教育費は公費を以て支弁することとなる）

明治二十五年　内原尋常小学校を廃止し、別に山路尋常小学校を置く。

森藤小学校校舎（旧森山村役場　現吉村定吉氏邸）

明治二十九年　森藤・山路両尋常小学校を統合し、森山尋常小学校を創立（現在地）。
八月　初代校長　寺沢嘉五郎
学級数　三学級
児童数　三〇～四〇名（内女子は四～五名）

明治四十年　（尋常小学校の義務教育年限が六ヶ年となる。）

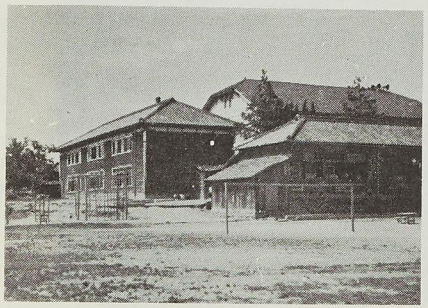
明治四十四年　高等科を併置。森山尋常高等小学校となる。
尋常科　六学級
高等科　一学級

昭和四年　高等科二年となる。

昭和十六年　森山国民学校と校名改称。

昭和二十二年　森山村立森山小学校と校名改称。

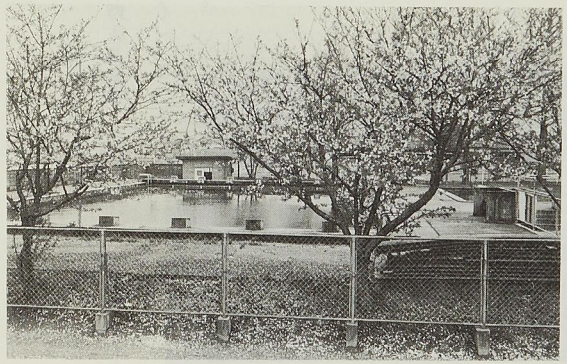
昭和二十九年　町村合併により鴨島町森山小学校となる。


森山小学校旧校舎（昭和15年頃）

以上は現在の森山小学校に至るまでの概略の経過であるが、この間児童数の増加と時代の要請により、校舎の増改築、校地の拡張が幾度か行われた。殊に戦後新学制の発足とともに、民主主義教育の普及と、教育の重要性認識の高まりにより、教職員の努力とPTA活動、一般村民の協力と行政施策が相俟って、施設・設備の充実が行われた。

中でも昭和二十年代の運動場の拡張、昭和四十二年のプール建設、昭和四十七年の創立百周年の創立百周年記念事業は、学校近代化のための画期的なできごとであった。

そして昭和五十七年には、鉄筋三階建の新校舎、昭和五十八年には体育館の建設が完了し、現代にふさわしく未来に開かれた教育環境が整備されるに至った。



森山小学校プール

〔付記〕

A 青石の門柱

森山小学校の校門の門柱は、明治四十四年廃校となった三村高等小学校の門柱を移転建立したものである。以来今日に至るまで、校地環境の幾度の変遷をこえて、変らぬ姿で立ち続けている。

森山小学校体育館

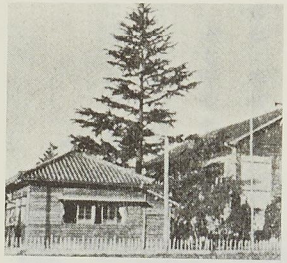
森山小学校校舎全景

ここで学び育っていく卒業生たちにとって、想い出の唯一のよすがとして、今後も変らぬ姿であってほしいものである。

B　ヒマラヤ杉

校門を入ると、左（南方）旧木造校舎脇にヒマラヤ杉の大木があった。大正の初期、卒業記念として植えられたものである。大正・昭和にかけて、ここに学んだ同窓生たちにとって、亭々として直立し、大空向けて伸びゆく姿は、希望の象徴として忘れ得ぬ存在だった。校歌（森永益男作詞）にも歌われ、日々の教育の素材としても大きな役割を果たし、学校の象徴ともなっていた。

昭和四十二年校舎改築の際、やむなく伐採・撤去されたことは惜しまれてならない。今その跡地近くに同じヒマラヤの幼木が、


ヒマラヤ杉と旧校舎（昭和30年頃）

門柱と新校舎

後継として植えられている。校歌のリズムとともに健全に育ち、早く先代に劣らぬ大木となり、再び森山小学校の象徴となってもらいたいものである。

なお古木の幹の一部、切断片が小学校理科室に蔵されている。

C　村の中心地

創設の事情から、通学区としての森藤・山路・内原・中島の略中央に位置し、以来九十年余の歳月にわたり、一村一校の小学校として、村の子弟が一様な基礎教育をここで受け育ってきた。

昭和初年には隣接地に村役場、その後農業協同組合、郵便局などが相次いで設置され、この地域が村の政治・経済・産業・文化の中枢を担うようになった。

殊に戦後の民主主義化とともに、各種の集会・行事が頻繁（ひんぱん）に行われるようになったが、それには多く学校の講堂・裁縫室・家事室・運動場などが利用され、村の発展に大きく寄与した。そして、ここに集う村民の大半は、親・子・孫にわたり同窓の先輩・同輩・後輩であるということ、一方、

ヒマラヤ杉の幼木

地域は純朴な農村地帯として、生活形態を共通にしていたことと相俟って、和と協力による平和な村づくりに大きく貢献したと考えられる。この伝統の気風は、町村合併以後においても、事あるごとに、森山地区の特色として息づいているようである。

D 歴代校長

創立以来校長として学校経営に当られた人たちは次の通りである。

①
寺沢嘉五郎
明29.7.25
28年9ヶ月
山路

④
山田和太郎
大11.10.18
1年6ヶ月
高原村(川島)

②
岡本　兵太
大5.3.31
3年
土成村

⑤
住友藤三郎
大13.3.31
4年
敷地

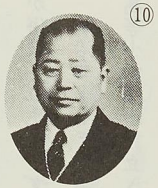
③
吉田　重雄
大8.3.31
3年6ヶ月
川田村

⑥
幸元　賢一
昭3.3.31
8年5ヶ月
山瀬町

添書

○番号は代順
○氏名
○就任年月日
○在職年月
○住所

⑦
阿部　英夫
昭11.8.31
1年7ヶ月
上浦



⑩
森　定雄
昭21.3.31
5年
鴨島

⑬
村山　実
昭45.4.1
1年
喜来

⑯
京野　正美
昭52.4.1
2年
山川町

⑧
後藤田英一
昭13.3.31
3年
川島町

⑪
徳野　三男
昭26.4.1
15年
牛島

⑭
近藤　富一
昭46.4.1
3年
市場町

⑰
渡部千代子
昭54.4.1
3年
牛島

⑨
河村　文平
昭16.3.31
5年
西麻植

⑫
高橋　浅子
昭41.4.1
4年
徳島市

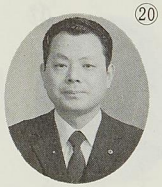
⑮
馬木　芳雄
昭49.4.1
3年
山川町

⑱
柏木　浩
昭57.4.1
3年
川島町

⑲

松島　公平
昭60.4.1
4　年
西麻植

⑳



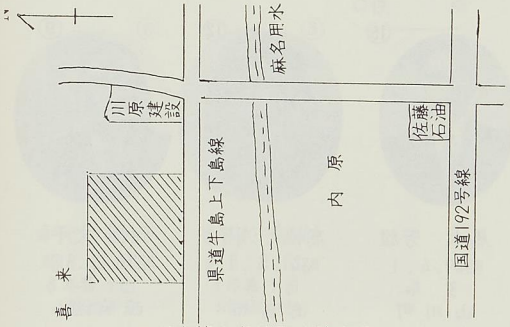
石川　貞夫
平元.4.1
現　在
上下島

2　三村高等小学校

森山地区における高等小学校の先駆となったのは、明治二十一年四月、内原尋常小学校に麻植高等小学校（川島町）東分校が併設されたことである。

明治二十七年、牛島・森山・鴨島の三村からなる組合立三村高等小学校が設立されることになり、同分校は廃止され、それぞれ修学年限四年の尋常小学校を終えた向学の子弟は、三村高等小学校に通学した。

明治三十二年秋、鴨島村喜来に校舎を新築、設備内容共に県下稀（まれ）に見る模範学校として、三村内の俊秀を育成した。



三村高等小学校敷地跡略図

明治四十年義務教育年限が六ヶ年に延長されるとともに、児童数は次第に減少することになり、続いて三村内の各尋常小学校に高等科が併設されるに至って、明治四十四年三月を以て廃校となった。歴代校長は次の通りである。

①武内兼太郎　明二七、四～明三〇、三
②岸　喜七郎　明三〇、四～明四一、一〇
③渡部　源八　明四二、四～明四三、三
④後藤田好吉　明四三、四～明四四、三

3　中　学　校

昭和二十二年四月　新学制実施により、森山小学校内に森山中学校として創立、校長は森定雄小学校長が兼務。
同年　八月　笠井元一専任校長となる。
昭和二十四年五月　独立校舎新築
昭和二十七年六月　森山・牛島両村による中学校事務組合結成

森山中学校校舎

昭和二十八年四月　麻植第二中学校森山校舎となる。
昭和二十九年三月　町村合併により鴨島町鴨島東中学校となる。

〔歴代校長〕

①森　定雄　昭二二、四～昭二二、七
②笠井元一　昭二二、八～昭二四、七
③村松心吾　昭二四、八～昭二六、三
④森　定雄　昭二六、四～昭二八、三

笠井　元一

村松　心吾

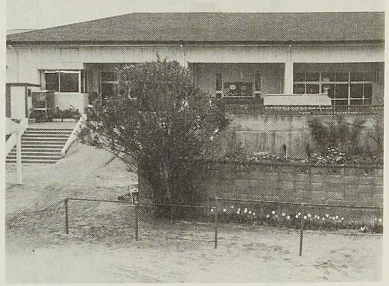
4　就学前保育

A　日曜幼稚園

義務教育の普及と小学校教育の充実に伴ない、大正期には該当児は殆んど洩れなく就学するようになった。就学前それぞれ異った環境で育った幼児が、入学後揃って円滑に学校生活に入れるよう、昭和初年頃から日曜幼稚園が開設された。指導者は小学校の日直の女子教員がこれに当った。

B　森山幼稚園

昭和二十四年十月　村立幼稚園として小学校内に創立。就学前一年保育開始。園長は小学校長が兼務。
昭和二十九年三月　町村合併により鴨島町森山幼稚園となる。
昭和三十六年四月　二年保育一部実施
昭和四十年四月　二年保育全面開始
昭和五十年二月　旧森山中学校跡に園舎新築。今日に至る。


幼稚園園舎

5　青年教育

小学校教育を終え、社会生活に入った子弟が、家庭や社会の実務に関する知識や技能の修得のため、大正三年には小学校に農業補習学校が開設されたり、昭和八年には女子補習学校が開設されたりした。昭和六年勃発した満洲事変を契機として、時勢は急激に国家主義に傾き、学校教育も皇国民育成を目標として行われるようになった。在郷青年に対しても、それに即した教育のため、昭和十二年

小学校に青年学校が付設され、専任教員が配置された。女子は昼間、家事・裁縫に加えて、公民教育が施され、男子は夜間、公民教育の他指導員によって軍事訓練が行われた。

二、社会教育

昭和二十年八月十五日、敗戦に伴なう社会の混乱は極度に達し、食糧・物資の不足による生活不安、国家主義思想の崩壊による社会道徳・秩序の紊乱、不透明な前途に対する虚脱感は、容易に回復できるものではなかった。

こうした社会情勢に対し、政府は昭和二十年十一月「社会教育の振興に関する件」により、一般国民の道徳・教養・体力など社会教育の必要、学校職員の社会教育への協力、学校施設の社会教育への開放などを訓令した。

昭和二十一年十一月三日公布、翌二十二年五月三日施行の日本国憲法により、主権在民の民主主義に基づく平和国家・文化国家建設の理念と方途が示された。

昭和二十二年三月、新憲法の理想を実現するため、国民教育の指針となるべき教育基本法が制定

された。社会教育法が制定されたのは、昭和二十四年六月である。それに基づき公的責任における社会教育が実施されるようになった。

一　公民館活動

A　森山村森山公民館

昭和二十五年十月設立、全村公民館というユニークな発想の下に、村長大久保純逸自ら公民館長となり、役場内に事務所を開設、専任主事を置いて社会教育の衝に当たらせた。

当時の活動として主なものは次の通りである。

①図書室の設置（村役場内）

石井駅前に廃業する書店があり、その蔵書一切を譲り受け、公民館図書として一般の使用に供した。

②料理講習会

婦人会を対象に、中学校家事室において度々開催、食生活の改善につとめた。

③ナトコ映画会

公民館主事（藤川竹夫）自ら映写技術資格をとり、三ヶ月に一回、小学校の講堂で映画会を開催、毎回満員の盛況であった。

④堆肥共進会

食糧不足に加えて、化学肥料は自由に手に入らず、僅かな配給制であったため、干肥（刈草）や人糞尿は貴重な肥料であった。村では堆肥奨励のため共進会を主催、巾・高さ・腐蝕度等で審査が行われ、優秀者には賞品として農具（鎌・フォーク等）等が贈られた。

⑤分館活動

村内各地域にある消防詰所その他集会できる場所を選び、それぞれ地域に合った行事が行われ、その都度公民館主事が出席、情報の提供を行うとともに行事に協力した。

当時そうした場所は大凡八ヶ所で、八分館と言われたが、それは次のようである。

○森藤地区　三谷　竜王神社　　東森藤　民　家
宮前　民　家　　○山路地区　青年会館
田中　民　家　　○内原地区　消防詰所
壇　消防詰所　　○中島地区　消防詰所

⑥昭和二十七年、草創期における公民館活動と社会教育の実績が認められ、県社会教育課から、表彰を受けた。

⑦昭和二十九年町村合併により、鴨島町公民館に引継がれたが、それまで森山公民館主事として活躍したのは次の人たちである。

藤川竹夫　昭二五～昭二七
山内米夫　昭二八～昭二九

B　鴨島町森山公民館

昭和三十二年一月　鴨島町公民館森山分館を置く。（旧役場庁舎）
分館長は大久保純逸。
昭和三十三年一月　益田　賢、分館長となる。
昭和四十二年四月　分館長は森山小学校長の兼務となる。
（小学校歴代校長参照）
昭和五十五年　鴨島町森山公民館となる。
館長は従来通り小学校長兼務。

森山公民館全景

昭和六十年四月　　桒原　肇専任公民館長となり現在に至る。

以上社会教育施設としての公民館の、発足以来今日までの経過を辿ってきた。戦後四十余年民主主義の理念の下、産業経済の復興・再建を経て、技術革新による高度成長により、かつてない豊かな社会が実現した。一方教育文化の普及と高度化により、人間生活は日々変革を遂げている。

寿命の延長による高齢化社会における生き方の問題等もあり、学校教育と相俟って、生涯教育を目指す社会教育の充実が当面の課題となってきた。その社会教育の拠点となるべき公民館の使命も一層重きを加えるわけである。

現在週間定例行事として、同好者による詩吟・詩舞・カラオケ・太鼓・合気道・舞踊・生花等の趣味活動、図書充実による読書活動、「森の音」による広報活動、町指定による成人講座、各種団体による集会活動等を行っているが、未だ十分とは言えない。

尚わが森山公民館は既述の如く、旧森山村役場庁舎であり、既に老朽化が進み、使命に適わしい施設内容とは言えない。早急な改築と現代化が望まれる。

2　社会教育団体

A　青　年　団

戦前、学校卒業後、未婚の在郷青年によって組織され、先輩後輩関係による社会生活の訓練、各種社会事業への奉仕参加、殊に全村運動会において、その準備や運営への奉仕と参加、仮装行列などに今その伝統を残している。

当時リーダーとして活躍した人たちとして、金山源伍・木村寛二・藤井四郎・木村義次・石田幸男等の名が残っている。

森藤の医師、後藤田尚中氏は、長期にわたり団長としてその育成と発展に貢献した。

戦後、山路の山下直市氏は、青年有志を糾合して青年連盟を結成し、青年団活動に新生面を開くべく、活発な活動を展開したが、惜しくも病気で倒れ挫折した。

昭和二十三年頃となり、団再建の気運が盛り上がり、森藤の

仮装行列参加者

藤川竹夫氏を団長とする森山青年団が復活し、団長のリードにより、青年らしい意欲的な活動が展開された。その中主な事業には次のようなものがあった。

①一夜講習会

玉林寺を会場として、時の県会議員後藤田耕平氏、県青年連合会会長山口一雄氏、県社会教育課主事等の人たちを講師として招き、講義を聴き懇談研修した。

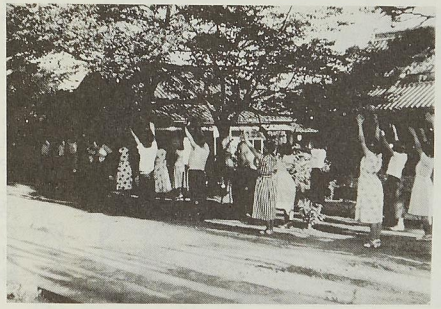
炊事接待には地元婦人会が協力してくれた。

②スケーダンスの会

GHQの指導により、小学校講堂で何回か催され、娯楽の少い時期でもあり、会場は毎回溢れる盛況であった。

③読　書　会

昭和三十年頃より毎月一回、団員の家庭を順次会場として開催、雑誌「家の光」により相互研修、小学校徳野校長の指導協力も頂き、盛会で有意義だった。



一夜講習会（玉林寺）・藤川竹夫氏提供

④鈴蘭楽団（すずらんがくだん）

終戦直後の昭和二十一年頃、山路地区の青年団員の協議により、麻植塚の筒井・大林両氏を指導者として楽団が誕生した。

鈴蘭楽団として学校での各種の催しや夏祭等に出演、他町村からの出演依頼を受けるなど、ユニークな楽団として、当時娯楽が少なく沈滞荒廃した社会に、明るさと希望を与えた。

尚アコーデオン・ギター・ヴァイオリン・トランペット等の楽器購入の資金づくりのため、上浦小林氏所有の溜池使用の許可を得て水を干し、鯉・うなぎ・なまず等の魚をとって売ったり、寄付を貰ったり、小遣銭を出し合ったりした苦労話が残っている。

団員として活躍したのは次の人たちである。

岡本　昌（団長）・阿部克祥・石田　透・山内芳夫・石川　博・工藤光夫・藤井敏夫・三好　一三好芳夫・藤井角太郎・藤井哲夫・甲斐清二・板東弘敏・森住国儀

小役として野上洋子・槙納清子

鈴蘭楽団・阿部克祥氏提供

団員たちは、毎夜小学校の講堂や集会所に集まり、練習に励んだ。当時は自由な解放感から、毎夜のように歓楽街に出入りし、遊興に耽るという青年の風潮の中にあって、実にすばらしい志向であった。然し昭和二十五・六年に至り、社会が次第に落ちつくようになって、団員もそれぞれ就職や結婚などにより減少、やむなく解散せざるを得なかったことは残念なことである。

⑤獅子舞の復活とその後

東森藤地区に伝わる獅子舞が、戦時中からすたれ、長らく埋もれていたが、昭和四十九年から青年団が郷土芸能としてこれを継承復活することになった。東森藤の藤川竹夫・鶴田太一・石田明・石田良一・桑田武志・石田富雄・木村敬の諸氏を指導者として、団員（団長原田嘉明氏他）が練習にはげみ、技能の習得につとめた。

毎年秋祭・文化祭などの行事には、欠かせぬ出し物として参加、郷土色を盛り上げる役割を果している。昭和六十一年の全国青年大会には県代表として参加披露、好評を博した。

然し時代の変化とともに、高校・大学への進学率の向上や、地域外就職者の増加に伴ない、在郷青年が急激に減少して、往時のような青年団としての活発な活動は見られなくなった。

B 婦人会

婦人の組織団体として戦前においては、有志婦人による愛国婦人会（会長後藤田寿恵氏）があった。

戦時色が次第に濃くなり、家庭や地域の担い手である男子が、次々に応召出征するようになると、銃後の守りとして婦人の役割が大きくなった。そうした時局の要請により結成されたのが国防婦人会（会長工藤マサノ氏）である。

出征兵士の送迎、留守宅への慰問や労働奉仕（畑仕事やたき木運びなど）、またモンペ・頭巾姿での防空訓練など、かいがいしく活動した。

国防婦人会の真剣な銃後の守りも空しく、昭和二十年八月、戦争は悲惨な敗戦となり、進駐

贈 出征軍人御家族日婦森山村支部（昭和17年12月6日）
後藤田 寿 恵 氏 提供

軍の軍政下、戦争遂行のための諸団体の解体とともに組織は消滅した。

新憲法により、平等の権利と地位を与えられ、婦人たちにその責任の自覚や地位向上のため、新しい婦人の組織結成の気運ができたのは、昭和二十三・四年の頃である。当時森山中学校の笠井元一校長、森山小学校の森定雄校長両氏の熱心な説得と指導、各地区婦人リーダーの奔走により、昭和二十四年、自主的団体として森山母の会が結成された。

会長には森藤の後藤田キクエ氏が選任され、活発な活動が展開された。その主な活動として、

①母親学級を開設してこどもの教育のための母親研修

②県指定による「農村にふさわしい婦人生活のあり方」研修

③文部省委嘱による「読書を通して生活を高める」研修

などがある。また実践活動として、農協婦人部・生活改善グループなど他団体とともに、食生活・台所・かまど・風呂場などの改善を通じて、生活の合理化・近代化の推進につとめた。

昭和二十九年町村合併に伴ない、翌三十年頃から、婦人団体についても町連合体の必要が叫ばれるようになった。その気運に即して、昭和三十四年四月総会の決議により、森山母の会は森山婦人会と改称されて新しく出発、会長は引続き後藤田キクエ氏がつとめた。

生活改善劇出演のメンバー
植納茂子氏提供

森山小唄振りつけ発表を終えて
植納茂子氏提供

昭和三十五年後藤田会長が町会議員職務のため会長辞退、後任として益田マツヱ氏が就任した。
昭和五十年益田会長辞任、後任には井出時恵氏が就任、現在に至っている。
井出会長十三年を終え、現在定着している活動として次のようなものがある。

①婦人の教養向上・健康増進のための勉強会
　家庭経済・青少年育成・同和教育・健康講座など
②ボランティア活動
　独居老人の食事サービス・老人ホームの慰問
③同好者による趣味学習
　手芸・民謡・舞踊・書道・生花など
④一日研修としての社会見学
⑤地区行事・町行事への参加協力

C　天　寿　会

戦後の民主々義化とともに各種の自主的団体が創設され、それぞれ活発な活動が行われるようになった。その中で高齢者を対象とした集いとして誕生した天寿会は特筆すべきことである。

青年団・婦人会・こども会などは、その原型が既に戦前にあり、戦後新たな装おいをもって、先ず各地区において復活再生し、町村合併後町として連合体をつくるという経過を辿った。

これに対し天寿会は合併後の昭和三十三年、先ず町内全域に呼びかけ、賛同者を募り、鴨島町天寿会として発足したものである。当時はまだ社会情勢も流動的で、高齢者の学習意識も一般的でなく、会員も一〇〇名程度、森山地区の参加者も多くなかった。然し創設当時、他の有志の人たちと相談り、先導的役割を果たし、初代会長としてその後の発展の基礎を築いたのは、元森山村長工藤保一氏であった。会の名稱も老人会や老人クラブとせず、天寿会としたのも同氏の発案でなかったかと今に感謝されている。

その後これを受けつぎ、会長として会発展のため貢献したのは次の人たちである。

川真田徳三郎（鴨島）　藤井芳一（牛島）　深見定一（飯尾）
七条康一（知恵島）　堀江安一（知恵島）　遠藤善八（牛島）

大村弁一（飯尾）　藤井厳雄（森山）

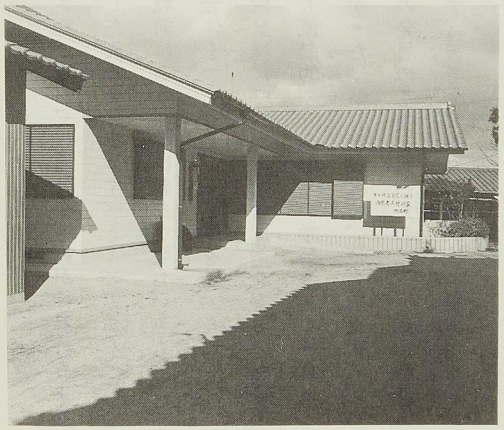
昭和四十八年四月（大村会長時代）、県・町などの指導もあり、地区組織がつくられることになり、森山地区を対象につくられたのが森山天寿会であり、初代会長には野口義男氏が就任した。

昭和五十年九月、野口会長死去に伴ない、後任として藤井厳雄氏が継承、今日に至っている。

その後内原地区が金山繁太郎氏を中心として分離し、内原天寿会をつくり、別箇に独自な活動をしている。現会長は北張武雄氏である。

森山天寿会として年間実施している主な事業は次のようである。

①生涯学習として高齢者教室の開設
　健康対策・食生活・運動・三世代交流等
②識見を高めるための旅行
③会員相互の親睦―新年会・芸能大会



内原老人憩いの家

④奉仕活動

○毎年九月二十日は奉仕の日―独居老人・施設入居者の友愛訪問
○神社仏閣の清掃・道路沿いの空カン拾い・六坊桜並木の手入れ

清掃奉仕に集った人たち
藤井厳雄氏提供

六坊桜並木の手入れを終って
藤井厳雄氏提供

D こども会

戦前においては、こどもたちにとって学習塾やけいこごともなく、農家のこどもでも家の手伝いをしながらも、外で遊ぶゆとりがあった。学校の放課後や日曜・休日など、こどもたちは部落のどこかに集まってよく遊んでいた。

男の子は、めん・ばい・くぎ打ち・虫とり・魚とり・鬼ごっこ・用水や池での水泳など、女の子は、かくれんぼ・まりつき・石けり・縄とび・用水や池での水泳など、時々の遊びに興じて、日の暮れるのも忘れて遊ぶ姿がよく見られた。

そうした遊びの間に、こどもたち同志の間に自然と秩序ができ、上級生の者がリーダー格となり下級生の世話もする。それがこどもの世界の伝統として、先輩から後輩へと受けつがれていき、やがては部落の人間として育っていったわけである。部落によっては、青年団にならい○○少年団として運動会などで気勢をあげたところもあった。

ところが昭和二十年の敗戦による混乱によって、こどもたちを支えていた大人社会の秩序が大きく変り、経済的困窮も加わって、こどもたちは目標や希望を失ったバラバラの存在になりかねない状態となった。当時の小学校長徳野三男、教諭森永益男の両氏は、こうした実情を何とかしなければと、親たちに呼びかけ、小学校のこどもたちを対象に、地域ごとにこども会を組織し、次代の後継者の健全育成をはかろうと訴え日夜奔走した。地域の親たちもこれに応え、昭和二十七年四月には東原にさくらこども会、東森藤にひまわりこども会が誕生し、翌二十八年には殆んど全地域に及ぶようになった。

その後、校区全地域にわたる十八こども会がそろい、文字通り森山こども会として今日に至っている。それは次の通りである。

①はなぞのこども会（三谷）　⑦ひのでこども会（寺谷）　⑬もみじこども会（岡野）
②えびす　〃（宮前・壇）　⑧いすず　〃（山路西）　⑭なかよし　〃（内原東・内原南）
③みどり　〃（田中）　⑨すみれ　〃（山路中）　⑮まつば　〃（内原西）
④あけぼの　〃（春日免）　⑩ひのでこども会（橋本）　⑯だるま　〃（内原北）
⑤ひまわり　〃（東森藤）　⑪さくら一　〃（東原北）　⑰白ゆりⅠ　〃（中島東）
⑥あおば　〃（向原）　⑫さくら二　〃（東原南）　⑱白ゆりⅡ　〃（中島中・中島西）

これらのこども会は、こどもたちの自主的地域活動の場であるとともに、学校にとっては校外生

活指導の場であり、地域の親たちにとっては、地域生活指導の場として、健全育成のため大きな役割を担っている。

こうした森山こども会の早期の創設と、その後の活動及び成果が認められ、県社会福祉協議会から数回表彰され、特に昭和二十九年一月には、毎日新聞社主催全国こども会活動コンクールにおいて全国表彰をうけている。

3 武道・体育

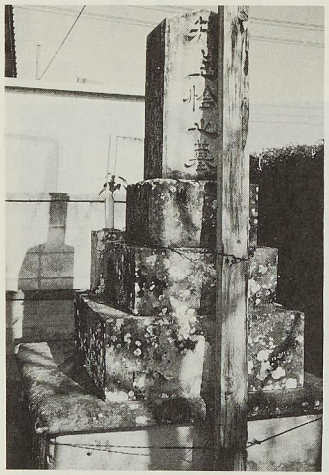
A 剣道

明治初期、近隣に聞えた剣道の達人として、中島村に井上恰(いのうえあたか)があった。井上は由緒ある井上家中興の人（十三代目）であり、文武両道に秀れていた。

廃藩置県(はいはんちけん)により、各村に戸長が置かれるや、中島村戸長として行政にも活躍した。

一方剣道においては、柳生流の奥儀を極め、神影相心流の名士として、自宅に道場を開き、多くの門弟を育てた。近隣の青年たちはもとより、隣接の各村、郡の内外からも数多くの門下生が集まり、その指導に努めるとともに、他流試合にも出て技を磨いた。

明治十七年惜しくも病歿したが、道場としては明治中頃まで続いた。当時教えを受けた門弟であり、技能修得の巻紙をもらっている人とし



門下生のつくった井上恰(あたか)の墓（中島西部）

て井上栄蔵・河村増五郎・井上沖太・井上惣作・片山政太郎等の名が残っている。

道場は現中川光氏邸付近にあったと伝えられるが、明治四十四年森山小学校に高等科が併置されるようになった時、仮校舎として使用された。

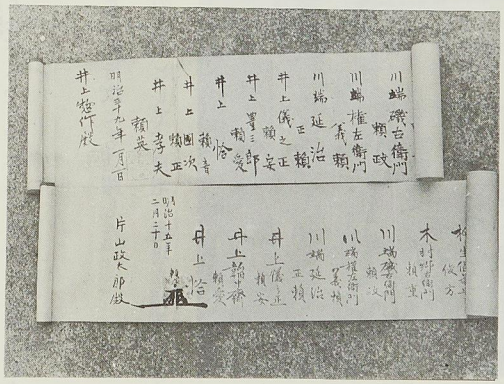
その後朽廃して、大正末年に至り取り壊された。

尚、森山地区には井上恰の他、相心柳生流の剣士として森藤に吉村武一郎があった。

B 柔術・柔道

明治後半頃、森藤大串家（現大串三夫氏）納屋を道場として、近辺の若い人たちが集まり、平尾五平を師範格として、藤本流柔術の稽古が行われ、他流試合にも出ていた。

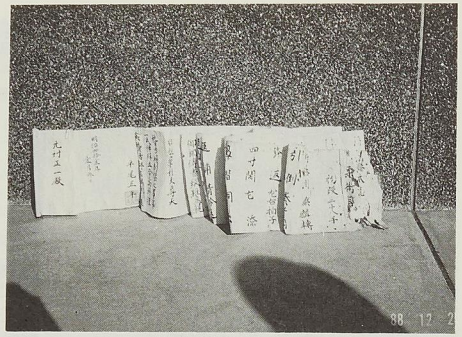
家業のかたわら夜間その他の暇に、ここで修業した同志の人たちとして、大串甚助・元村正一・



技能修得の巻紙

桒原寿一・麻植朝一・宇山八百蔵などがあった。

元村正一家（現元村熊男氏）には技能修得証としての巻紙があり、元村は田中の宮田家を道場として、付近の青年たちを指導したと伝えられる。



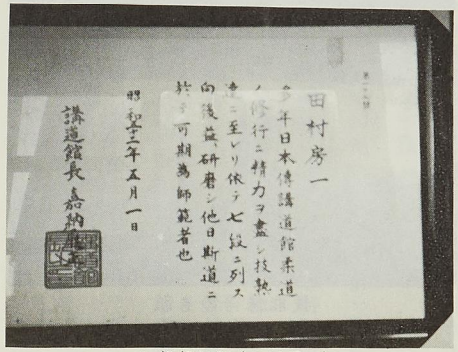
技能修得の巻紙

なお戦後昭和二十五年頃から、町内有段者とともに、青少年の愛好者を集め、その指導に尽力した人として、山路の田村房一氏がある。田村は朝鮮警察官として勤務中、柔道を修得、六段の資格を持ち帰り後七段を授けられている。

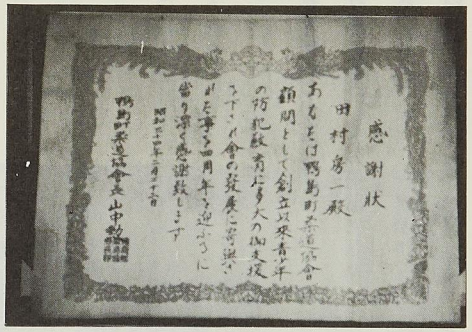
大串家の納屋（春日免）

C 相撲

古い起源をもつ国技として、明治時代に入ってからスポーツとして認められ、個人対個人の力技として一般に普及した。この地域でも「宮相撲」「草相撲」として、神社の境内などで紋日の行事



七段段位証(田村房一)



感　謝　状(田村房一)

として行われ、青少年が技を競い合った。

明治から大正にかけては、地方力士による宮相撲が盛んで、力士として認められた者は、しこ名が付けられた。これを「まわしを下す」と言い、土地の宮相撲で披露された。

力士の中で広く名が知られている強い者は、常に大たぶさを結っていて、各地の宮相撲に出かけて行き、賞金かせぎをしていた。

相撲には個人戦や、三人消し、五人消しなどの勝ち抜き戦があり、三人消し、五人消しの勝者には賞金も大きく、その他に客から「華」と言って多くの銭の包みが投げこまれた。

これらのアマカ士にはそれぞれ職業はあるが、阿波勧進相撲に登録されて、強さや成績によって番付けがつけられた。最高位は大関で東西に一人ずつ、または二人、以下関脇・小結・前頭と続く。上位力士は県外へも遠征していた。特に板野郡栄村（現板野町）では、伝統的に相撲が強く、「栄の相撲にもまれにゃ一人前の力士にゃなれん」と言われていた程だった。

森山村にも、明治末から大正年代にかけて、阿波地方相撲力士として活躍した人に、中島の三木田照太があった。しこ名を中島照太と言い、常に大たぶさを結っていたという。体格も力士らしく、身長六尺（一、八メートル）体重二十四貫（九〇キログラム）あったと言われる。阿波勧進相撲番付として前頭筆頭

まで昇進した。

D　マラソン

毎年一月四日から六日まで三日間、県南から県北にわたり、県内二九〇キロを若人の健脚が競う徳島駅伝は、阿波路を沸かすスポーツの祭典と言えよう。

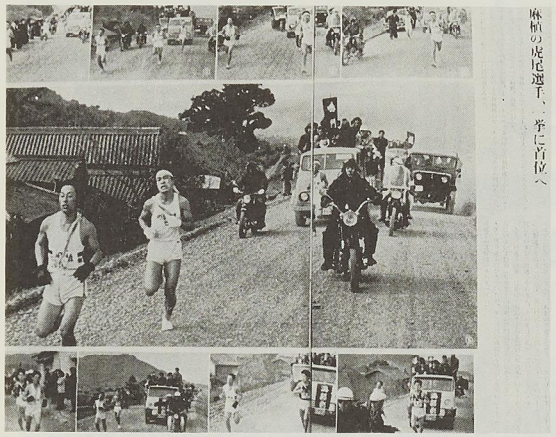
この徳島駅伝は、県内十四郡市の対抗競技として、昭和三十年に発足し、昭和六十三年で三十四回の年輪を重ねたことになる。この間永く記憶に止めたいことは、初期十回の記録において、麻植郡チームが優勝二回、二位四回というすばらしい実績を重ね、しかもその実績を支えた主力選手が森山の人たちであったということである。

すなわち石田専一・虎尾延幸・虎尾栄一・田村登・渡部成孝・桑田定明・長谷一利・石川貞夫・蔵山裕之・村本健夫の諸氏である。なお選手の育成強化、競技指導、支援のため奔走尽力した人たちとして、田村輝雄・石田専一・井出義久・宮田高一・森住光義・中西幸一・楠木一郎・田中常夫森住岩三郎の諸氏がある。

このように、マラソンと共に森山の名を高めるに至ったについては、それまでの長い試練と実績

があったことを挙げねばならない。

昭和二十三年、森山体協として陸上部をつくり、中島の三木田文夫氏は自ら練習に励むとともに気運をつくった。


麻植の虎尾選手、遂に首位へ

第4位から一挙に3人を抜き、首位におどり出て力走する虎尾延幸選手（昭和36年第7回徳島駅伝）

昭和二十六年から二十九年まで四年間、市町村対抗として、羽ノ浦―鳴門間の五区駅伝マラソンが行われていた。当時まだなじみ薄い森山チームとして毎回参加、優勝は鳴門市に譲ったものの準優勝を飾り、マラソンの森山を印象づけた。当時活躍した人たちには、後藤田万平・石田良一・桒原茂一・虎尾延幸・虎尾栄一・石川貞夫鹿児島　・田村登・渡部成孝・元村時夫・桑田勝一・原田嘉納の諸氏があり、支援者として田村輝雄・石田専一・森住光義・森住岩三郎の諸氏があった。

第８回国民体育大会聖炎旗リレー参加者
昭和30年頃（写真提供阿部克祥氏）

以上のような森山マラソンの輝かしい黄金時代と、豊富な持ち駒ともいうべき選手層の厚さをふり返って思うとき、徳島駅伝第十一回目以降の、麻植郡チームの急激な力の低下は淋しい。

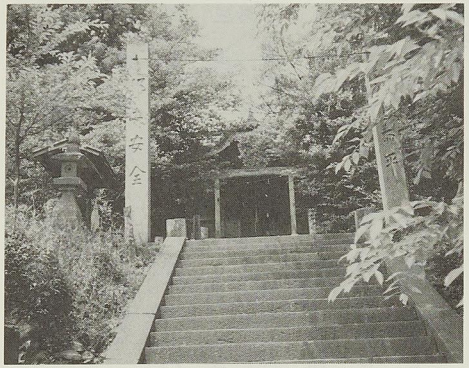
しかし、昭和六十一年頃より、選手の強化策が実りつつあり、かつての王者への夢再びを目ざしてがん張っている。

伝統の森山マラソンが、再び麻植郡チームの牽引車となり、主力となる日が来るのを、地区民の全てが願望している。

第三章　神社・仏閣

第一節　神　社

森藤八幡神社（旧村社）



八　幡　神　社

一、鎮　座　地　　森藤四反地

二、祭　　神　　誉田別尊（ほんだわけのみこと）　足仲津彦尊（あしなかつひこのみこと）

仲長足姫尊（なかたらしひめのみこと）

三、由　　緒

八幡宮の縁起が二巻あり、一つは延享三年、一つは正徳三年に書かれたもので、これによると京都の石清水八幡宮の分霊といわれるが、何時頃創建されたかは詳かでない。たゞし、棟札には、室町時代の永正八年（一五一一年）となっている。古いものに木像一対（随神）と駒犬一対がある。

熊野神社

一、鎮座地　山路寺谷
二、祭神　誉田別尊（応神天皇）
三、由緒

平康頼が勧請したと伝えられる熊野権現があり、その境内に経塚がある。現在露出している直経三～六センチの平たい川原石は、経塚の表土にばらまいてあり、経塚の位置を示すものである。

経文を入れた筒や字を書いた石は、地中に埋めてあるのが普通で、仏教的供養をしたものであるといわれる。鎌倉期の石仏と五輪塔を蔵している。

熊野神社拝殿

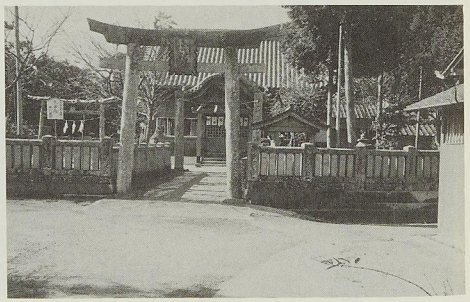
国一八幡神宮（旧村社）

一、鎮座地　山路字東原
二、祭神　誉田別命（応神天皇）ほか
三、由緒

阿波志によると、国一八幡と称し、室町の頃の棟札を蔵している。むかし、仙光寺が別当であった。

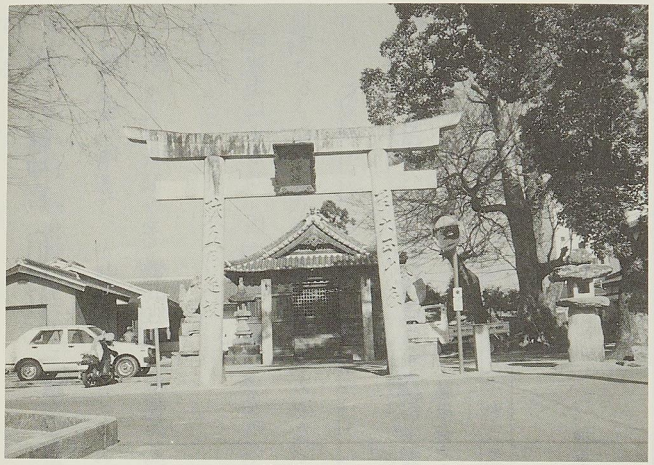
（表）
奉建立八幡宮一宇社頭国安穏祈大檀那本願藤井吉左衛門敬白
大工藤原長太夫次作之
近久忠兵衛

（裏）
神主権大僧都十川



国一八幡神宮拝殿

もと慶雲の宮と呼ばれていた。慶雲とは神や仏がお姿を現す時に出る五色の雲のことで、目出たい雲と言われている。



荒神社拝殿

荒神社

一、鎮座地　内原字西張

二、祭神　興津彦命・興津姫神
火産霊神

三、由緒

永禄年間（一五五八～七〇年）の頃に、内原菊太夫の一族が、泉州上之芝合戦に参加しての帰途。摂津宝塚から分霊し、内原円の元二百四十三番地に勧請せられたといわれている。

ここに、寛延四年の銘ある石燈籠があり、小さな祠がある。江戸の中期頃に十王堂を現在の地に移転し、荒神社を十王堂の跡へ移転したといわれている。境内には椋の大木が多い。

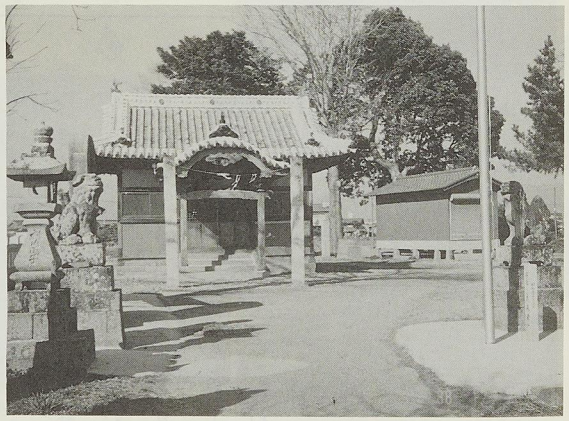
諏訪神社（旧村社）

一、鎮座地　中島字福井

二、祭神　多邪御奈刀弥命・天照大神・大山祇神・事代主神・伊邪那岐命・迦具土神・岐神　外

三、由緒

文治二年（一一八六）勧請と伝える。もとは、諏訪の原にあったが（昭和二十二年頃まで鎮座跡の古塚が残っていた。）慶長か慶安の頃の大しけで上下島の諏訪の元に流され、この地で鎮座していたのであるが、中島の総鎮守である氏神が、いつまでもよそ村にあったのでは、氏子にとって不本意なので、大正十二年（一九二三）四月現在地へ移転した。

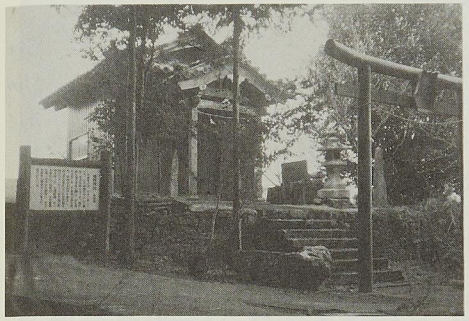


諏訪神社拝殿

康頼神社

森藤壇の北斜面にあり、平康頼を祀っている。康頼の死後、遺言によって家臣の鶴田某がこの地に祠を建て、主君を神として祀ったのが始まりという。

その後荒廃した時代もあったが、天明年間に附近住民や旧家臣らが相談して、再建したといわれている。

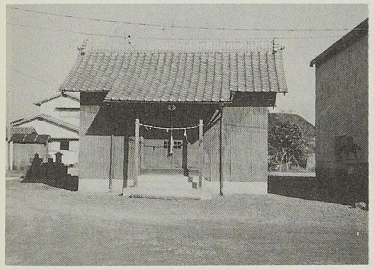


康頼神社全景

春日神社（森藤春日免）

祭神は天児屋根命。

古代に天領の屯倉のあった所で、春日免（免は部の転化か？）の地名が付いたともいう。また、奈良の春日神社の分神を観請したともいわれている。



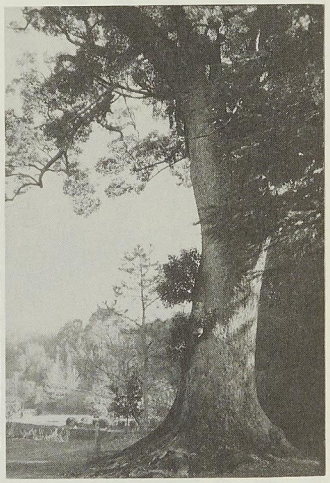
春日神社拝殿

八大竜王神社

一、鎮座地　森藤三谷
二、祭神　豊玉姫命外
三、由緒

創建の時期その他については資料がなく不明である。社務所内に蔵せる太鼓に文化十二年と記してあり、七代将軍家斉の頃で一八一五年に当たる。境内には樹齢約四百年以上と推定される楠の巨木が聳えている。創建が楠と同時代であるとすれば室町末期とみるべきであろう。

竜王は、雨を降らす神通力があるので、昔から森藤では日照りが続くと、この竜王神社で雨乞いの祈願をしていた。



八大竜王神社の大楠

八大竜王神社拝殿

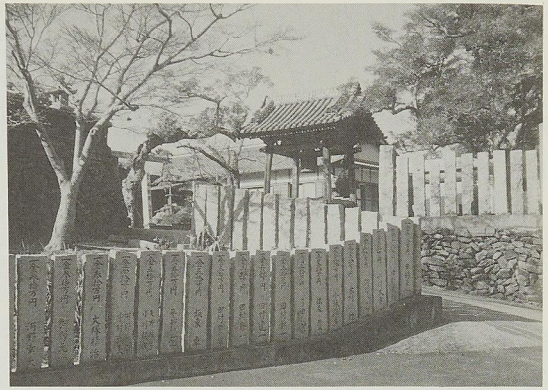
第二節　仏　閣

慈眼山玉林寺

玉林寺のある寺谷集落

山路字寺谷にあるこの寺は、禅宗で臨済宗妙心寺派。本尊は千手観音（十一面観音）である。

文治二年（一一八六）平康頼（照性法師）が、源頼朝の命により、麻殖保司に任ぜられて着任したが、数年後に、後白河法皇から賜わった閻浮檀金の一寸八分（約六㌢）の、千手観音を本尊として、山路村東寺谷の地に玉林寺を建立し、更に寺谷川水源のある山頂に鬼界山補陀洛寺をも建立した。また、西南の六坊にも有徳の僧六人を置いて、鹿が谷事件の関



玉林寺門前

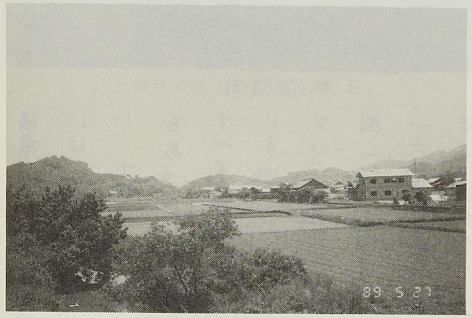
係者や、亡母の冥福を祈ったといわれている。「阿波誌」には、天正年中兵火にあったため両寺を合わせて一山にし、十二の子院もあったが、すべて廃絶したと言い伝えられている。慶長年間（一五九六～一六一五）亮長老と祖越がともに堂宇を建立して曹洞宗としたが、また、荒廃し、延宝年間（一六七三～一六八一）にその弟子宗本が、現在地に中興開山して臨済宗となった。阿

玉林寺本堂（山路寺谷）

波西国第三十番の観音霊場である。この寺には県指定文化財の絹本著色十六善神像図と、樹齢三百七十年のモクコクの古木がある。

十川山持福院仙光寺

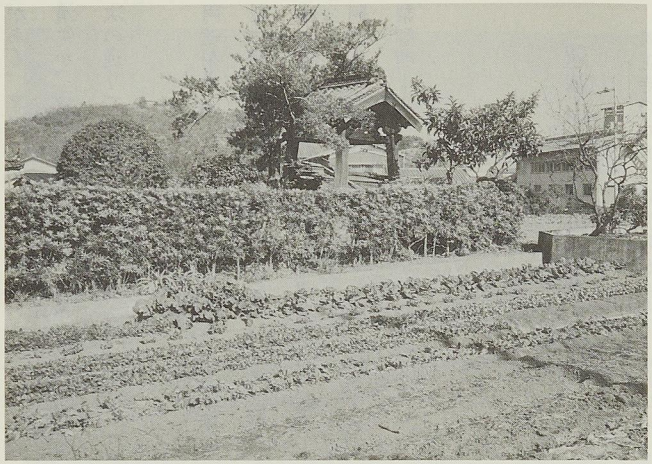
山路東原にあり、日蓮宗の寺である。本尊は日蓮大菩薩を祀っている。開基は不明であるが、正平年間（一三四六～一三七〇）に、僧善智が中興したと伝えられている。古くは国一八幡神社の別当であって、持福院と称しており、



山路の集落

修験の聖護院の末寺であった。天正年間（一五七三～一五九二）には、長宗我部の兵火によって、

仙光寺本堂（山路東原）


昔日の面影をとどめる仙光寺鐘楼

焼かれたとの伝聞がある。明治維新の際に天台宗に改宗して園城寺の末寺となったが、のちしばらくして、十川右近師が日蓮宗に改宗した。当寺には貴重な古文書が数十通残っている。

東光山持正院三谷寺

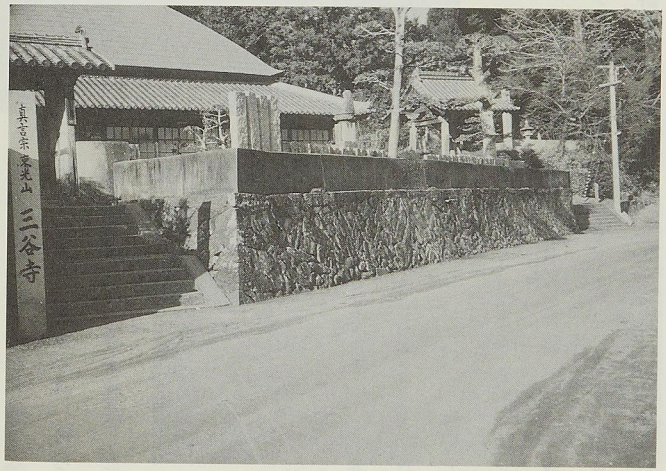
森藤字三谷にあり、真言宗御室派で、本尊は地蔵菩薩である。もとは森藤西浦谷にあったといわれ、その地から約千年くらい前の古瓦が発見されているというから古い寺である。天正年間戦火にあったが、同十四年（一五八六）現地に再建した。仙光寺古文書の天正十七年ならびに、文禄二年の袈裟筋目之覚に三谷寺云々の書

がある。享保二年に讃岐高松の出身である僧清栄が、中興開山となっている。歴代住職は次の通りである。

阿遮梨清栄→阿遮梨法真→阿遮梨円雄→阿遮梨白明→阿遮梨実現→阿遮梨隆雄→阿遮梨亮雄→阿遮梨信厳→阿遮梨快順→阿遮梨愿剛→阿遮梨竜応→阿遮梨円我→阿遮梨隆真→阿遮梨智晴→現住典亮

蓮華山宝池院善正寺

善正寺の本尊は阿弥陀如来で、山路字神ノ



三　谷　寺（森藤三谷）

善　正　寺（山路神ノ木）

木にある。真宗興正寺派で、天文十九年（一五五〇）僧教圓によって開基されたと伝えられる。なおまた、「阿波誌」には善勝寺とあり、西本願寺に属していて、二百年前（慶長年間）に准如という僧が、今日の寺名に改めたと記している。同誌に書かれている文字は

「在山路村隷西本願寺二百年前釋准如定寺名」

廃大仙寺（山路常玄）

創建は平安期と推定。天正十年の秋、長宗我部の兵火で炎上し、再建に至らず廃寺となった。